

# 大藪遺跡・下久世構跡

2023年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 大藪遺跡・下久世構跡

2023年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、工場増築に伴う大藪遺跡・下久世構跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和5年2月

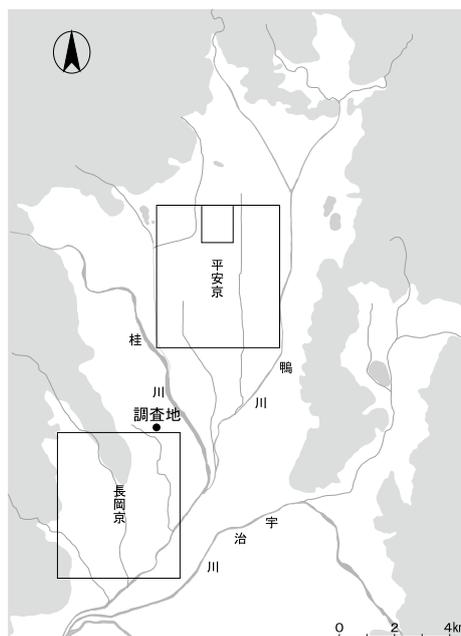
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- 1 遺 跡 名 大藪遺跡・下久世構跡（京都市番号 18 S 203）
- 2 調査所在地 京都市南区久世殿城町526番地の1
- 3 委 託 者 京都フードパック株式会社 代表取締役 玉水小百合
- 4 調査期間 2022年7月21日～2022年9月13日
- 5 調査面積 261㎡
- 6 調査担当者 三好孝一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「久世」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 三好孝一
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 分析・同定 石材：元京都府立山城郷土資料館 橋本精一氏
- 16 協力者 調査に際して、國下多美樹氏からご指導・ご教示をいただいた。記して感謝を申し上げます。

(調査地点図)



# 目 次

|             |    |
|-------------|----|
| 1. 調査経過     | 1  |
| 2. 遺跡の位置と環境 | 3  |
| (1) 位置と環境   | 3  |
| (2) 周辺の調査   | 3  |
| 3. 遺 構      | 6  |
| (1) 基本層序    | 6  |
| (2) 遺構の概要   | 6  |
| (3) 第1期の遺構  | 7  |
| (4) 第2期の遺構  | 7  |
| 4. 遺 物      | 13 |
| (1) 遺物の概要   | 13 |
| (2) 土器類     | 13 |
| (3) 瓦類      | 23 |
| (4) 土製品     | 23 |
| (5) 石製品     | 24 |
| 5. ま と め    | 25 |

# 図 版 目 次

|     |    |                                       |
|-----|----|---------------------------------------|
| 図版1 | 遺構 | 第1期遺構平面図 (1:100)                      |
| 図版2 | 遺構 | 第2期遺構平面図 (1:100)                      |
| 図版3 | 遺構 | 調査区南壁・東壁断面図 (1:80)                    |
| 図版4 | 遺構 | 溝50実測図 (1:40、1:60)                    |
| 図版5 | 遺構 | 掘立柱建物1実測図 (1:80)                      |
| 図版6 | 遺構 | 溝3実測図 (1:100、1:40)                    |
| 図版7 | 遺構 | 掘立柱建物2・3実測図 (1:80)                    |
| 図版8 | 遺構 | 溝2実測図 (1:100、1:40)                    |
| 図版9 | 遺構 | 1 調査区北半第1期全景 (南から)<br>2 溝44検出状況 (東から) |

- 図版10 遺構 1 溝50（南西から）  
 2 溝50土器出土状況（南から）  
 3 溝50完掘状況（南西から）
- 図版11 遺構 1 調査区北半第2期全景（南から）  
 2 調査区南半第2期全景（北から）
- 図版12 遺構 1 掘立柱建物1（西から）  
 2 掘立柱建物1 柱穴76断面（北から）  
 3 掘立柱建物1 柱穴77断面（北から）  
 4 掘立柱建物1 柱穴71断面（北東から）  
 5 掘立柱建物1 柱穴74断面（南東から）
- 図版13 遺構 1 掘立柱建物2（北から）  
 2 土坑35完掘状況（北から）  
 3 土坑45完掘状況（北から）
- 図版14 遺構 1 溝1（西から）  
 2 溝2-A北半（北から）  
 3 溝3南半（北から）  
 4 溝2-A・B・C断面（北から）  
 5 溝3中央断面（北から）
- 図版15 遺物 溝50出土土器
- 図版16 遺物 溝3出土土器、溝2-A・溝1出土土製品

## 挿 図 目 次

|     |                    |    |
|-----|--------------------|----|
| 図1  | 調査位置図（1：5,000）     | 1  |
| 図2  | 調査区配置図（1：500）      | 2  |
| 図3  | 調査前全景（南西から）        | 2  |
| 図4  | 作業状況（南西から）         | 2  |
| 図5  | 周辺調査位置図（1：5,000）   | 5  |
| 図6  | 溝44断面図（1：40）       | 7  |
| 図7  | 柵1・2実測図（1：80）      | 8  |
| 図8  | 土坑5・35・45実測図（1：40） | 10 |
| 図9  | 溝1実測図（1：100、1：40）  | 12 |
| 図10 | 溝44・50出土土器実測図（1：4） | 14 |

|     |                         |    |
|-----|-------------------------|----|
| 図11 | 土器15（左）と2018年調査区出土土器（右） | 15 |
| 図12 | 溝3出土土器実測図1（1：4）         | 16 |
| 図13 | 溝3出土土器実測図2（1：4、60のみ1：3） | 17 |
| 図14 | 土坑45出土土器実測図（1：4）        | 18 |
| 図15 | 溝2-C出土土器実測図（1：4）        | 18 |
| 図16 | 溝2-B出土土器実測図（1：4）        | 19 |
| 図17 | 溝2-A出土土器実測図1（1：4）       | 21 |
| 図18 | 溝2-A出土土器実測図2（1：4）       | 22 |
| 図19 | 出土瓦拓影及び実測図（1：4）         | 23 |
| 図20 | 出土土製品実測図（1：4）           | 23 |
| 図21 | 出土石製品実測図（1：4）           | 24 |
| 図22 | 遺構変遷図1（1：300）           | 26 |
| 図23 | 遺構変遷図2（1：300）           | 27 |
| 図24 | 周辺遺構変遷図1（1：1,000）       | 28 |
| 図25 | 周辺遺構変遷図2（1：1,000）       | 29 |

## 表 目 次

|    |         |    |
|----|---------|----|
| 表1 | 周辺調査一覧表 | 4  |
| 表2 | 遺構概要表   | 6  |
| 表3 | 遺物概要表   | 13 |

## 付 表 目 次

|     |               |    |
|-----|---------------|----|
| 付表1 | 土器類観察表        | 31 |
| 付表2 | 瓦類・土製品・石製品観察表 | 33 |



# 大藪遺跡・下久世構跡

## 1. 調査経過

今回の調査地は、京都市南区久世殿城町526番地の1に位置し、附近は弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡とされる大藪遺跡ならびに鎌倉時代から室町時代の居館跡と位置づけられる下久世構跡の東部に相当する。

今般、当該地に工場増築工事が計画され、これを受けた京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）は、当該地の東側において平成30年（2018）に実施した試掘調査及び発掘調査の成果に基づき発掘調査が必要と判断した。

調査は事業者から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施し、調査面積は文化財保護課から指示を受けた261㎡とした。現地での調査は令和4年7月21日から開始し、9月13日を以て調査後の埋め戻し作業までを完了した。

試掘調査結果と既往の発掘調査成果から、今回の調査でも弥生時代後期の溝や、古代の建物、中世以降の居館関連遺構の検出や、それらに伴う遺物の出土を予測しながら調査を実施した。

現地調査では最初に重機によってアスファルト被覆・盛土・旧耕作土を除去し、その後人力によって遺物包含層および遺構の掘削を行った。遺構はすべて基盤層上面において確認され、その時



図1 調査位置図（1：5,000）

期は弥生時代後期から近世におよぶ。これらのうち弥生時代の遺構を第1期、平安時代から江戸時代の遺構を第2期と二段階に区分し、おのおのの写真撮影と平面測量を行った。なお、掘削土置場の都合上、調査区を南北に二分したため上記作業は計4回を数え、これらの作業を経て9月13日に埋め戻しならびに仮囲い撤去までの現地作業をすべて完了した。調査終盤の9月2日には、検証委員の國下多美樹氏ならびに文化財保護課の検査を受け調査の確認と指導を受けた。

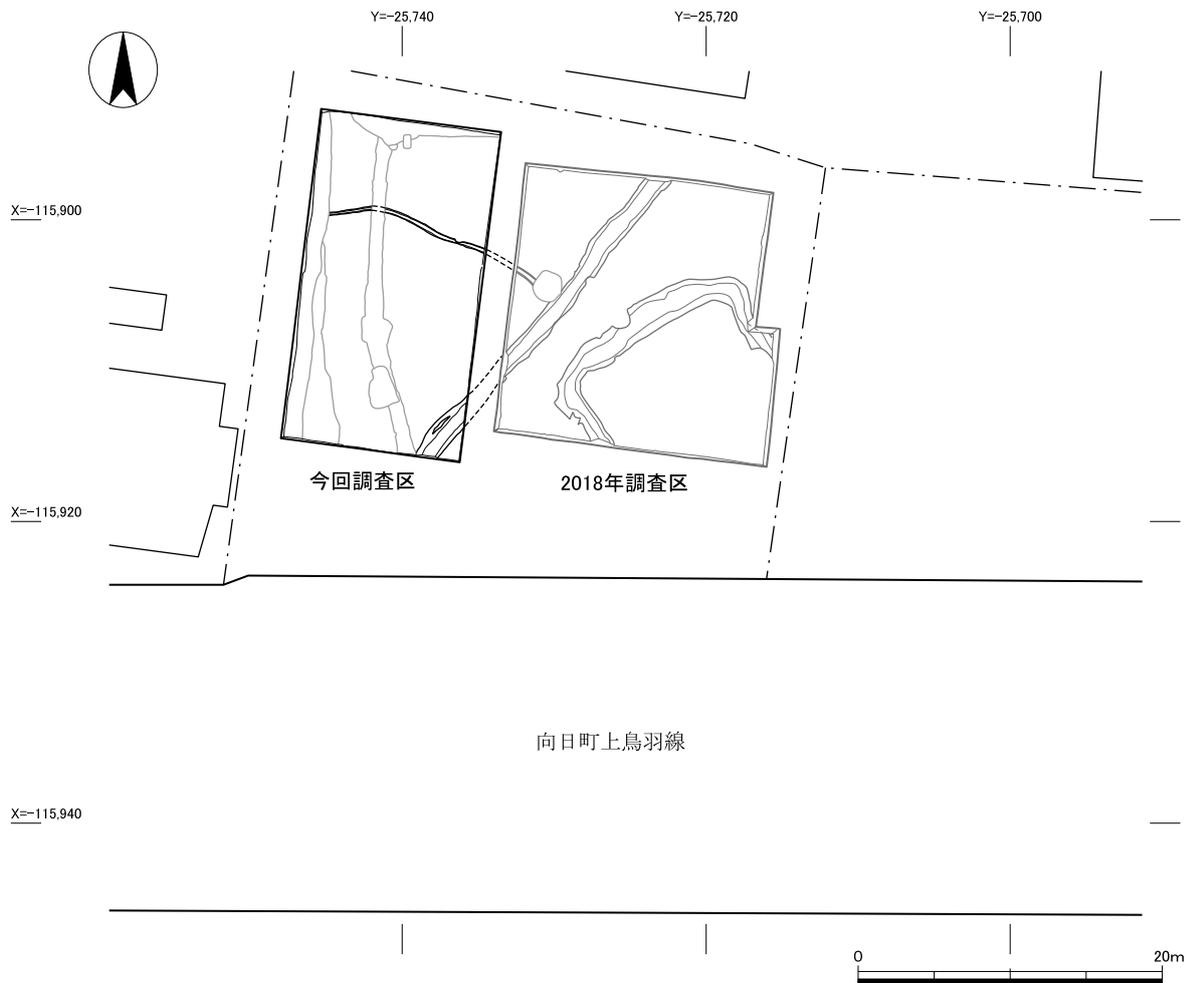


図2 調査区配置図 (1 : 500)



図3 調査前全景 (南西から)



図4 作業状況 (南西から)

## 2. 遺跡の位置と環境

### (1) 位置と環境

遺跡は京都市南西部の桂川右岸に立地し、桂川水系により形成された沖積地上に営まれる。今回の調査区は弥生時代から平安時代にかけての集落や墓地として周知されている大藪遺跡の西部域に位置するとともに、中世の居館跡である下久世構跡の南東部、さらに下久世城跡の東側に相当する。周辺で行われた調査では、今回の調査地の北東側において弥生時代から室町時代にかけて北西から南方向に幾度も流れを変化させながら流下する旧流路が確認されており、今回の調査地もこの旧流路により形成された自然堤防上に立地する。周辺に所在する中久世遺跡や下久世城跡もこの旧流路右岸沿いに形成された自然堤防や微高地などをたくみに取り込むような形で存立したと考えられる。また古代においては長岡京の北辺からさらに200mほど北側に離れた場所に相当する。南側近接地で行われた数箇所の地点でもこの時期とされる掘立柱建物や溝、井戸が検出され、京域外である周辺地の土地利用の一端をうかがうことができる。中世後期には久世氏によって統治されたとされる下久世構や下久世城という一般集落とは異なる城館的施設が設けられるが、その成立から廃絶に至る過程や時期などの具体相は詳らかではない。

### (2) 周辺の調査（図5、表1）

今回の調査地周辺では1972年より発掘調査が実施され、その数は25地点におよぶ。それらを地点と概要とに分けまとめたものを図5と表1として示し、以下、それに従って時代順に要説する。

**縄文時代：**大藪遺跡東端の19地点の調査で土坑2基を検出し、包含層中から中期後半の土器も出土した。このほか、今回の調査地から北に約150m離れた5地点でも流路内から土器の出土が報告され、同じく北東へ約300m離れた3地点でも後期の宮滝式らしき深鉢片が出土している。

**弥生時代：**過半数の調査地点から後期の遺構や遺物が確認され活発な動きがみられる。主な遺構には堅穴建物、掘立柱建物、溝などがあり、方形周溝墓から構成される墓域も確認されている。

これらの中でも14地点で検出された京都府内では最大級ともいえる非常に大型で独立棟持柱を持つ掘立柱建物が注目される。この建物の西側に近接して掘立柱建物が検出され、12・22地点では一辺10mを超えガラス玉が出土するような大型の堅穴建物が検出された。これらは50mほどの範囲に主軸を揃えるようにして設けられていることとも相まって大藪遺跡を大きく特徴づけている。

このほか、遺構には伴わないが、石庖丁やサヌカイト製石鏃、剥片なども出土し、今回の調査でも溝50から後期の土器の中に混在して中期と目される土器の底部が出土し、3地点では杭を伴う中期の溝も検出されていることから、より古い段階の遺構が存在したことも推定される。

**古墳時代：**9地点で庄内式から布留式土器、11・23地点で堅穴建物が検出された。いずれの時期も古墳時代前期内で収束し、中期は微量の遺物がみられるのみで衰微したことを窺わせる。

**平安時代：**長岡京期とそれ以降とに大きく二分される。前者の主なものに12・14地点で検出さ

表1 周辺調査一覧表

| 調査番号 | 調査年       | 主な遺構  | 主な遺物  | 文 献   |
|------|-----------|---|---|---|
| 1    | 1972      | 奈良～長岡：溝状流れ。奈良：杭列。   | 弥生：弥生土器。古墳：土器類。奈良～長岡：土器類、人面土器、土馬、木製品、獣骨など。平安～鎌倉：土器類、瓦。                          | 梅川光隆『大藪遺跡発掘調査報告』六勝寺研究会 1973   |
| 2    | 1979      | 弥生：溝、柱穴。中世：溝。   | 弥生：弥生土器。  | 磯部 勝「77 大藪遺跡」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2012                 |
| 3    | 1980～1981 | 弥生中期：溝（杭跡）。長岡～平安：溝。鎌倉：建物、柱跡、井戸、土坑、溝。                            | 縄文：縄文土器。弥生：弥生土器、木製品、石鏃。長岡～平安：土器類。鎌倉：土器類。  | 平田 泰『大藪遺跡発掘調査概要 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981                            |
| 4    | 1981      | 弥生～古墳：流路。長岡：遺物包含層。  | 弥生～古墳：自然木片。長岡：須恵器、土師器、瓦。  | 磯部 勝「58 大藪遺跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983          |
| 5    | 1983      | 奈良～平安：流路（杭列）。   | 縄文：縄文土器。弥生：弥生土器。古墳：土器類。奈良：土器類、土製品。平安：土器類、土製品。鎌倉～室町：土器類、木製品。                     | 堀内明博・鈴木廣司「46 大藪遺跡」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1985            |
| 6    | 1985      | 時期不明：落ち込み、流路（杭列）。   | 弥生～平安：土器類、木製品。鎌倉～室町：土器類。  | 上村和直・久世康博「43 大藪遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988            |
| 7    | 1986～1987 | 弥生～平安：流路。弥生：溝、土坑。長岡：溝。平安：溝、土坑。鎌倉以降：柱穴、溝、土坑。                     | 弥生：弥生土器、木製品。古墳：土器類。奈良：土器類、木杭。平安：土器類、瓦類、木製品。鎌倉以降：土器類、木製品。                        | 吉崎 伸「16 大藪遺跡・中久世遺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991           |
| 8    | 1987      | 弥生：堅穴建物。奈良：流路（護岸施設）。鎌倉：濠。                                       | 弥生：弥生土器、石鏃。古墳：土師器、須恵器。奈良：土師器、須恵器。平安：土師器、須恵器。鎌倉：木製品。                             | 鈴木廣司『大藪遺跡発掘調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988                                  |
| 9    | 1987      | 弥生：掘立柱建物、柱穴。弥生～古墳：堅穴建物、溝。長岡：柱穴。                                 | 弥生：弥生土器、石器。古墳：庄内式土器、布留式土器。飛鳥：土師器、須恵器。   | 上村和直「長岡京左京一条三坊跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989                 |
| 10   | 1988      | 鎌倉～江戸前期：掘立柱建物、柱穴、井戸、土坑、溝。江戸中期：礎石・根石、土坑、溝。                       | 鎌倉～室町：土器類。江戸：土器類。   | 吉崎 伸「大藪遺跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989                       |
| 11   | 1990      | 弥生：堅穴建物、方形周溝墓。古墳：堅穴建物、土壇墓、掘立柱建物、溝。長岡：掘立柱建物（総柱）、柵。室町：小溝群。        | 弥生：弥生土器。  | 鈴木廣司「35 長岡京左京一条三坊・大藪遺跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994        |
| 12   | 1997～1999 | 弥生：堅穴建物、方形周溝墓、溝。長岡：掘立柱建物、井戸、柵、溝。平安後期：井戸、溝。室町：掘立柱建物、礎石建物、井戸、堀、溝。 | 弥生後期：弥生土器、木製品、ガラス玉。長岡：土師器、須恵器、瓦、木製品、獣骨。平安後期：木製品。室町：土師器、瓦器、陶磁器、木製品。              | 西大條 哲・出口 勲・吉崎 伸「24 大藪遺跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2000      |
| 13   | 1999～2000 | 弥生：堅穴建物。平安：土坑。鎌倉～室町：掘立柱建物、柵、井戸、溝、堀。桃山～江戸：掘立柱建物、柱穴、柵、溝、土坑、井戸、堀。  | 縄文：縄文土器。弥生：弥生土器。古墳～奈良：土器類。平安：土器類。鎌倉～室町：土器類、木製品、金属製品、石製品。桃山～江戸：土器類、木製品、金属製品、石製品。 | 吉崎 伸・出口 勲・西大條 哲・宮下則子「19 大藪遺跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002 |
| 14   | 2001      | 弥生：大型掘立柱建物。長岡：掘立柱建物、溝。  | 弥生：弥生土器。長岡：土器類、瓦。   | 小泉信吾・千喜良淳『大藪遺跡発掘調査報告書』大藪遺跡発掘調査団・安西工業株式会社調査部 2002                      |
| 15   | 2006      | 弥生：方形周溝墓。平安：土坑。室町：建物、溝。   | 弥生：弥生土器。平安：土器類。室町：土器類。  | 平田 泰『中久世遺跡・大藪遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-19 2007                         |
| 16   | 2007      | 弥生後期：堅穴建物、炉、土坑、溝。平安～鎌倉：柱穴。室町：建物、柱穴、堀。                           | 弥生：弥生土器、石器。平安後期～鎌倉：土器類。室町：土器類。  | 西森正晃『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-32 2007                          |
| 17   | 2010      | 長岡：土坑。室町～江戸：掘立柱建物、柱穴、柵、堀、溝、井戸、土坑。                               | 弥生：石器。古墳：須恵器。長岡：土器類、瓦、土製品。室町～江戸：土器類、木製品、金属製品、土製品、石製品。                           | 木下保明・近藤章子・電子正彦『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-9 2010                |
| 18   | 2010      | 室町～江戸初期：建物、門、柱穴、柵、井戸、堀、溝、土坑。江戸：柱穴、溝、水路、土坑。                      | 弥生：石鏃。古墳～平安：土器類。室町～江戸初期：土器類、金属製品、石製品、木製品。                                       | 南出俊彦・田中利津子『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-13 2011                    |
| 19   | 2011      | 縄文：土坑。長岡：溝、井戸。室町後期：建物、柵、溝、井戸、土坑。江戸：溝、畔。                         | 縄文：縄文土器。長岡～平安：土器類、石製品、木製品。室町後期：土器類、金属製品、石製品、木製品。江戸：金属製品、石製品。                    | 山本雅和・田中利津子『大藪遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-18 2011                         |
| 20   | 2011      | 弥生：溝、掘立柱建物、溝、落ち込み、土坑。中世：溝、柵。                                    | 弥生：弥生土器、木製品。中世：土師器。   | 上村和直「大藪遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013                          |
| 21   | 2012      | 長岡～平安：溝。室町：柱穴、土坑。江戸：堀、溝、土坑。                                     | 長岡～平安：土器類。室町：土器類、銭貨。江戸：土器類、銭貨、木製品。  | 尾藤德行『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-6 2012                           |
| 22   | 2012～2013 | 弥生：堅穴建物。  |   | 小檜山一良・津々池惣一「大藪遺跡・下久世構跡」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014           |
| 23   | 2015      | 弥生～古墳：堅穴建物、方形周溝墓、杭列、土坑。長岡～中世：溝、土坑。中世～近代：溝、土坑。                   | 弥生～古墳：弥生土器、土師器、土製品、木製品、石製品、金属製品。長岡～中世：土師器、須恵器。中世～近代：須恵器、石製品。                    | 兼康保明ほか『長岡京跡・大藪遺跡』イビソク京都市内遺跡調査報告第13輯（株）イビソク関西支店 2016                   |
| 24   | 2017      | 弥生：流路、溝、土坑。平安：土坑。   | 弥生：弥生土器。平安（長岡）：須恵器、緑釉陶器、瓦。鎌倉～室町：焼締陶器。   | 新田和央「大藪遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成28年度』京都市文化市民局 2017                          |
| 25   | 2018      | 弥生：方形周溝墓、溝。古墳：溝。平安：掘立柱建物、柱列、柱穴。鎌倉：掘立柱建物、柵、溝、井戸。室町：掘立柱建物、柵、井戸。   | 弥生：弥生土器。古墳：布留式土器。平安（長岡）：黒色土器。鎌倉：土師器、瓦器、木製品。室町：土師器、焼締陶器、輸入磁器、瓦類、石、木製品。           | 末次由紀恵『大藪遺跡・下久世構跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2018-5 2019                         |

れた掘立柱建物がある。これらはいずれも建物軸を正方位に向け、中でも14地点で検出された掘立柱建物は3棟が東西に整然と並んだ状態で検出されたことで注目される。

なお、今回の調査で検出された掘立柱建物1と、東側の25地点で確認された掘立柱建物（建物1）とは、掘形の形状や規模からこの段階の遺構ともみられるが、ともに時期比定可能な出土遺物がないことや、主軸が正方位から西に振っていることから確定はできない。

後者には南側隣接地の12地点で検出された2条の溝や井戸がある。溝のうちいずれか一方は、位置や出土遺物から今回検出された溝3に連続する遺構の可能性を持つ。

鎌倉・室町時代：各地点で建物や井戸、溝などが検出される。特に東側の大藪城跡に含まれる13・17地区では掘立柱建物を主とする遺構が多数検出され、これらに伴う遺物の量や内容も濃密となる。調査区の南に位置する12地点では礎石建物が確認され、これを意識するように突出部を設けて開削された溝は居館の門とそれを囲繞する堀を想起させ、下久世構の実相をうかがう示唆的な遺構となる。

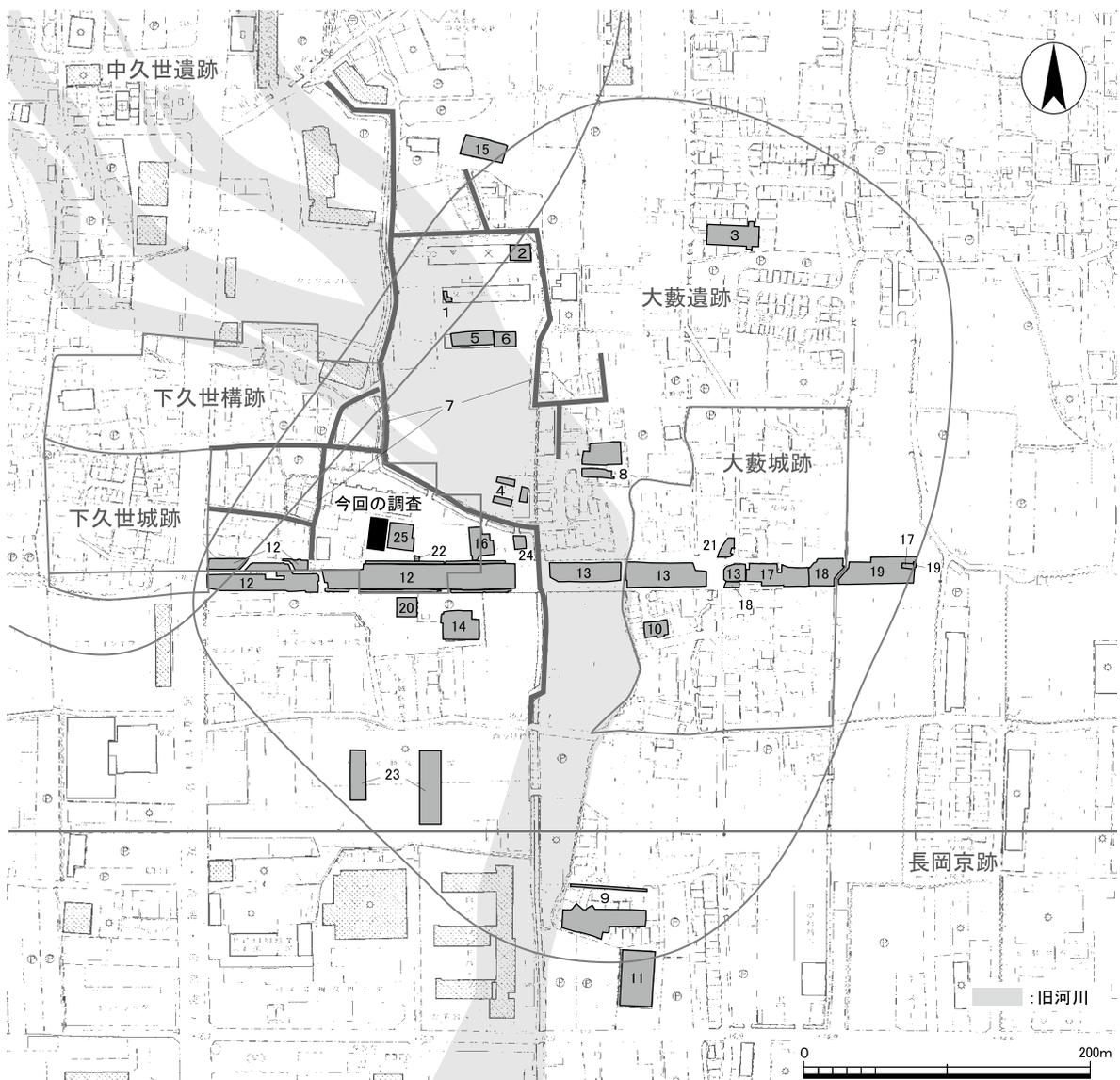


図5 周辺調査位置図（1：5,000）

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序 (図版3)

調査着手前の現地は、層厚0.2m前後の旧耕作土上に約0.8mの盛土がなされ、さらにおのおのの厚さ0.05mの碎石とアスファルトで被覆されていた。現地表面の標高は北側の高い部分で16.20m、南側の低い部分で16.15mとなる。近・現代までの遺物を含む旧耕作土を除去すると、標高15.0m±0.1mで全面にわたって部分的にシルトを交えた暗灰褐色から暗黄灰色系の極細砂を主とする基盤層が露呈した。すべての遺構は本層上面において認識したが、著しいマンガンの結核と、鉄分の量・管状斑結の形成により遺構確認が妨げられた。さらに下層については、溝などの肩部などから観察したところ、遷移的にシルトから細砂・中砂に変化し、色調も縦根痕などにより酸素が供給されていない部分では、下位にゆくに従い青灰色系の色調に遷移しグライ化している状況を確認した。なお、南東部においてはこの基盤層上に層厚0.05m以下の薄層(25・26層)が観察された。遺物を含まないため時期は不明ながら、近現代の旧耕作土形成以前の作土層が低い部分に遺存したものと考えられる。

#### (2) 遺構の概要

基盤層上面で検出された各遺構の時期は、弥生時代後期と平安時代から江戸時代までである。弥生時代後期の遺構には2条の溝があり、東側の2018年調査区で検出された溝に連続すると考えられる。平安時代の遺構にはこの時期とも考えられる掘立柱建物と柵と後期の溝がある。建物は2018年調査区で検出された建物1と主軸と柱筋を揃えるため、両者に深い関連性があったと思われる。後期の溝は南側の1997～1999年調査区で検出された2条の溝のいずれかに連なる可能性もある。鎌倉時代から室町時代の遺構には掘立柱建物のほか柵や土坑がある。これらのうち西端で検出された溝は、1997～1999年調査区で検出された南北溝との関連性が高いと考えられ、ほぼ同位置にはこれに重なるように江戸時代の溝が開削されたことを明らかにした。

表2 遺構概要表

| 時 代    | 遺 構                |
|--------|--------------------|
| 弥生時代後期 | 溝44・50             |
| 平安時代   | 掘立柱建物1、柵1、溝3       |
| 鎌倉時代   | 掘立柱建物2・3、土坑45、溝2-C |
| 室町時代   | 柵2、溝2-B、土坑5・35     |
| 江戸時代   | 溝1、溝2-A            |

### (3) 第1期の遺構 (図版1)

#### 弥生時代後期

溝44 (図6) 調査区中央部からやや北に向かった位置で検出され、西端を溝2-Aによって失う。検出長は10.5mで、基本的に東から西へ続くが、途中で南東側に向きを変える。

位置関係より2018年調査区で一部確認されていた溝44に連続すると考えられ、これを含めた総延長は約15mとなる。幅は0.2~0.3m、深さは0.1~0.15m、深さ0.15m前後である。断面形は偏平あるいはいびつな「U」字形をなし、埋土は部分的には2層に細分されるが、基本的には濃い褐色系のシルト混り極細砂の単一層である。溝底の標高は東と西端でおおよそ14.8m、中央付近で約14.7mとなり、中央部が0.1mほど低くなる。両端に高低差がないことに加え、中央部がより低いことから、水を流す目的で開削された溝である蓋然性は低い。

出土遺物には弥生時代後期の土器がある。これらは埋土上位を中心とする位置から出土し、細片化して全形のうかがえるものはない。器種には壺・甕・高杯があり、うち5点を図10に示した。

溝50 (図版4) 調査区南東隅で検出した。規模は長辺側で長さ6.0m、幅1.3~1.6mで、深さ約0.8mである。断面形は偏平な「U」字形をなし、埋土は細かく分層されるが、大局的には中位に堆積する炭化物を多く含む黒色から黒褐色の土層を境として二分される。遺物はこの層界部分に集中し、図版4や図版10に示すような完形の壺や甕、接合の結果ほぼ旧態にまで復元可能な高杯や鉢がまとまって出土したため、人為的所作のもとに置かれたものと考えられる。

平面的位置関係からみて2018年調査区の溝234の延長部となるのは確実で、埋土の堆積状況や遺物の時期、検出状況などもこれを否定する要素はなく、これら全体を含めた場合、北東から南西に直線的にのびる総延長25m以上の溝となる。溝底の標高は2018年調査区の北東部端が14.6m、今回の南西隅が14.2mのため、北東から南西に向かって河床勾配  $I = 1/625$  で流下したことがわかる。

なお、1997~1999年調査区では、SD07とされた弥生時代後期の溝が検出されており、その溝が今回の溝50の延長線上に位置する関係にあるため、双方が連続する可能性がある。

### (4) 第2期の遺構 (図版2)

#### 平安時代

掘立柱建物1 (図版5) 調査区南部で検出した。東・南辺は調査区外、西辺は溝2-Cによって削剥され全容はうかがえないが、桁行3間かそれ以上、梁行2間以上を数える。東西棟の建物で、主軸は北から西へ約5度振る。掘形の形状は北辺の柱列が東の1基を除いて不整形であるの

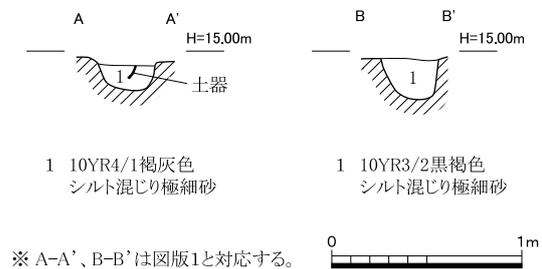


図6 溝44断面図 (1:40)

に対し、南側の柱列は隅丸方形を基本とする。北辺の柱列の掘形は北東隅を除いて南側よりも一回り小型であることから庇と考えられ、北東の柱穴74のみが身舎と同等の規模と形状となるのは、隅柱となるためなのかも知れない。規模は庇側が柱穴74を除いて直径0.4～0.6m、身舎が0.7～1.0m、深さは庇が0.2～0.5m、身舎が0.5～0.8mで、埋土は周辺の他の遺構と比較して灰色を帯びる。柱間寸法は柱痕の確認できないものが多く不確定要素を残すが、東辺の1間が2.6m、北庇の柱穴74と73の間が1.8m、身舎は東より2.1m・2.4m・2.9mと不揃いで、柱穴73・74・78・75の4基では直径0.15～0.2m強の柱痕が確認された。なお西辺の柱間寸法が広いこと西庇の建物になる可能性も残る。

建物の時期については、土師器の小片が出土したのみで明確にはできないが、他の遺構との重複関係からみて、鎌倉時代以前となることは確実で、掘形の形状や規模、埋土の様相などから推察して2018年調査区で検出された建物1と同じく、長岡京期を前後する時期が妥当としておきたい。

**柵1**（図7） 調査区中央からやや北で検出された4基の柱穴からなる東西方向の柵である。東部は調査区外、西部は柱推定位置が溝2-Aと重なり旧状は不明だが、現状で8.2m分を確認した。

柱間寸法は東から2.4m、3.6m、2.1mで、主軸は柱筋を確定しづらいが北から西へ5度程度振れる。柱穴の平面形は不整な円形から隅丸方形で、規模は直径または一辺0.3～0.4mである。深さは0.2m未満と概して浅く、うち2基では直径0.1mほどの柱痕を確認した。

遺物から時期を特定できないが、埋土の特徴や主軸が掘立柱建物1とほぼ共通するため、これとほぼ同時期と推定される。ちなみに掘立柱建物1と柵1との距離は10.7m（約三五尺）となる。

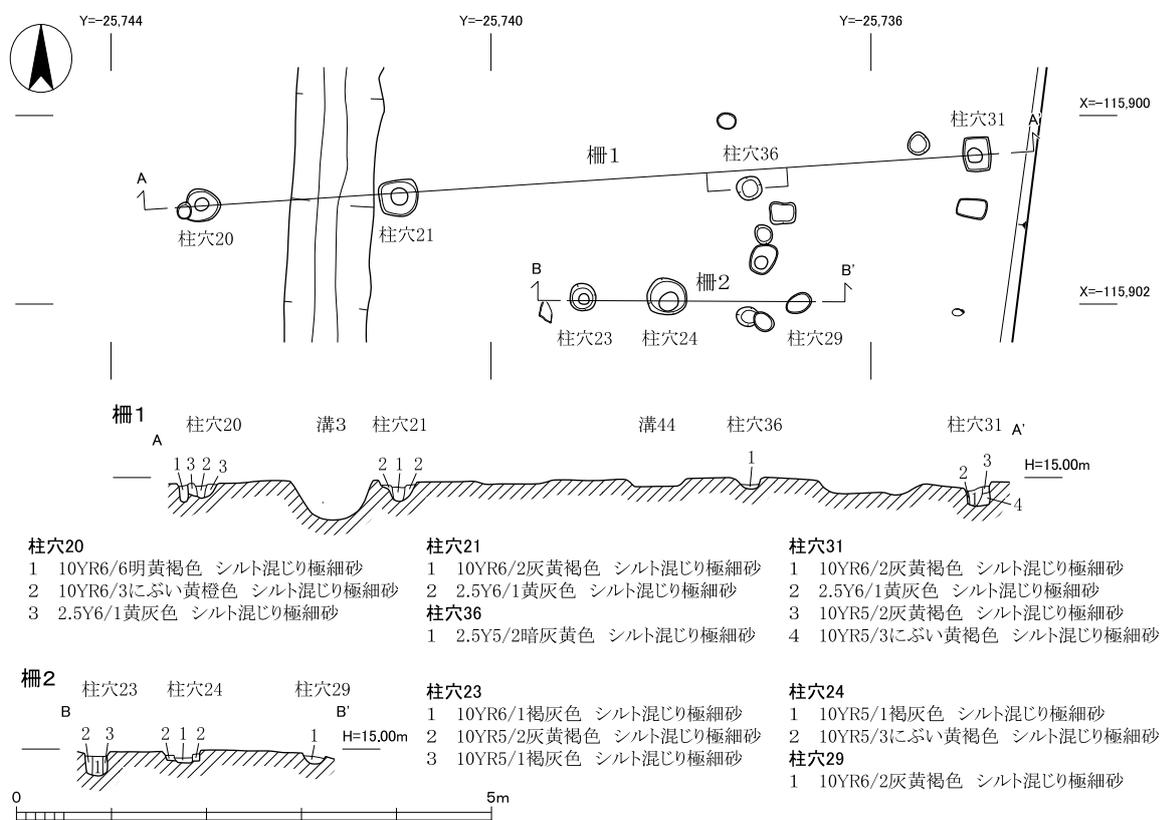


図7 柵1・2実測図（1：80）

**溝3**（図版6） 調査区中央からやや西の位置で検出された南北方向の溝で、途中若干東側へ向きを変える。検出長は21.5mで、北側を溝1により削剥され、南側が調査区外となる。

規模は幅0.9～1.2m、深さ0.7～1.0m、断面形は南側へ行くほど溝底幅が広がる。溝底の標高は北端が14.6m前後、中央附近が14.5m、南端が約14.7mで、周辺地形に対し逆勾配となるため水を流す以外の目的で開削されたと考えられる。また、位置や時期から1997～1999年調査区で検出されたSD14またはSD15につながるとも考えられる。

埋土は黄褐色から灰褐色系のシルト混り極細砂を主とし、2ないし3層に細分され、中位との層界には部分的に炭化物を含む箇所を確認した。

出土遺物には、瓦器、土師器、東播系須恵器などのほか、華南沿岸湾窯系の白磁の壺や椀、砥石がある。これらのほとんどは調査区ほぼ中央から南にかけての底面が広がった部分の中ほどからまとまって出土し、瓦器椀は比較的大型の破片が多く、時期は12世紀初頭のもので占められる。なお、これらの中には山茶椀の椀の腰部下半から高台を加工した転用硯も含まれていた。

### 鎌倉時代

**掘立柱建物2**（図版7） 調査区中央から南東に向かう位置で検出した。「L」字形に屈曲する柱穴列と、柱筋は通らないが南辺柱穴列とはほぼ柱間寸法が同じ柱穴47を積極的に評価し、掘立柱建物として復元した。西側柱穴列の柱間は北より2.1mと2.0m、北側が2.0m、南側が2.1mで、建物の主軸は西辺柱列から導き出すと北から11度西へ傾く。

掘形の形状は円形から隅丸方形をなし、大きさは直径あるいは一辺が0.2～0.3m、深さ0.1未満～0.2mと総体的に浅く、すべての柱穴で径0.1m程度の柱痕を確認した。

出土遺物がほとんどなく、このなかに時期を知る手掛かりとなる特徴もみいだせなかったが、2018年調査区で検出されていた建物2の所見を参考とするならば当該期にあてられよう。

**掘立柱建物3**（図版7） 先述の掘立柱と同じく矩形に曲がる柱穴列が抽出されることや、2018年調査区で検出された柱穴のうち隅柱に相当するものがあるため、図23のような掘立柱建物と認識した。この場合、主軸を北から西に約10度傾け、桁行2間（3.0m）、梁行推定3間（6.9m）、柱間寸法北側2.3m、西側1.5mとなる等間の東西棟建物として復元される。

掘形の形状は円形から隅丸方形で、規模は直径0.1～0.3m、深さは0.1～0.3mとなる。うち柱穴34では直径約0.15mの柱痕が確認され、腐朽しながらもわずかに木質が観察された。

各柱穴からは細片化した遺物がわずかに得られたのみで時期を知る手がかりは得られなかったが、2018年調査区での遺構検出状況などから類推してこの時期の建物としておきたい。

**土坑45**（図8） 調査区南部のほぼ中央から検出された。南北に長軸を持つ不整な台形状をなし、規模は長軸2.7m、北側の短辺1.0m、南側の長辺1.8m、深さは0.6m強で、坑底は中央がややくぼむ。断面形は隅丸の逆台形状をなすが、南と西の壁面は部分的に内側に向かって削り込まれる。堆積土は5層からなり、最下層には湛水状態を示すシルト混り粘土が観察された。

遺物には瓦器の椀や土師器の小皿のほか、青磁の皿や白磁の椀などの輸入陶磁器があり、うち5

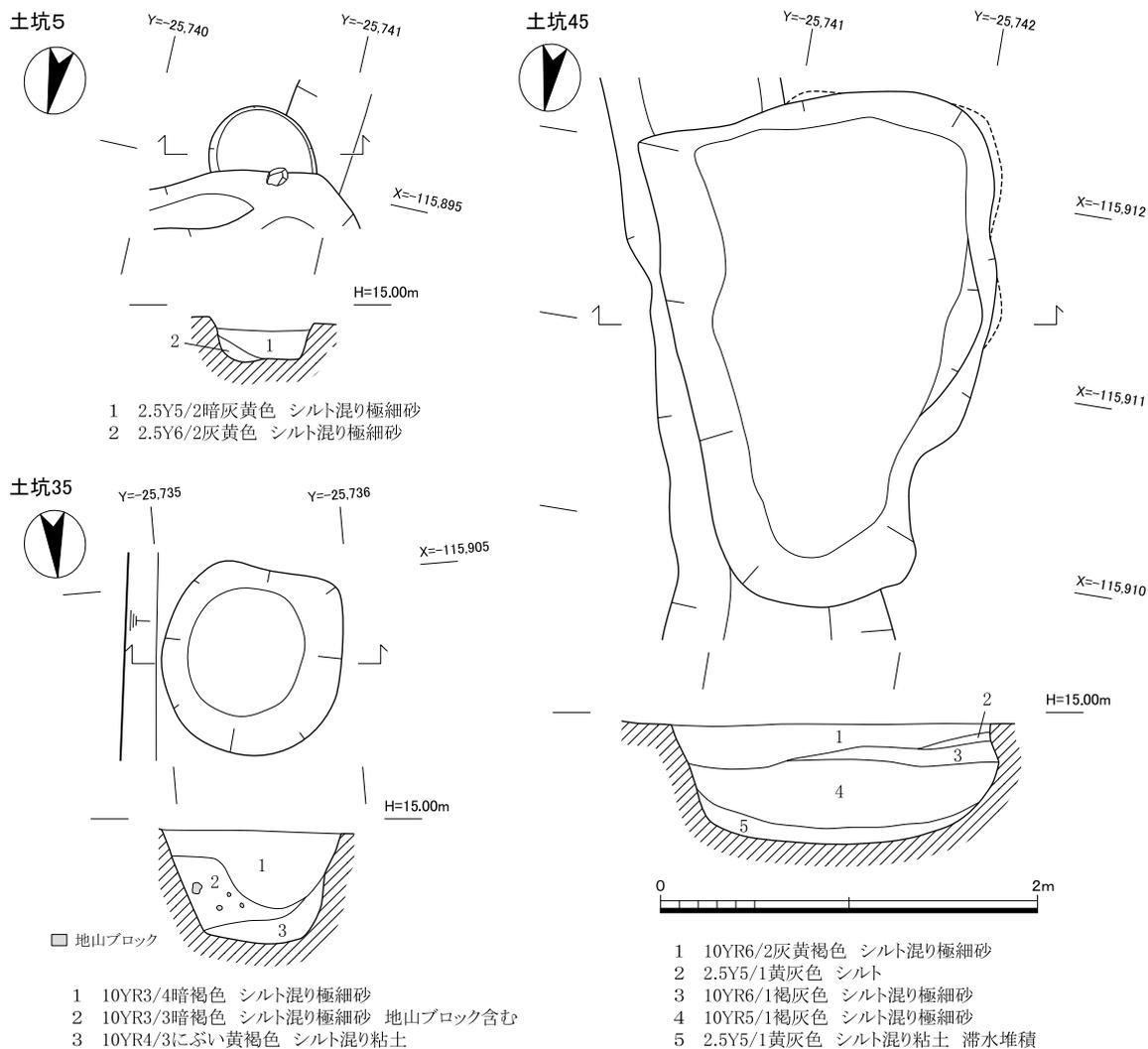


図8 土坑5・35・45実測図(1:40)

点を図14に示した。その時期から埋没したのは13世紀中葉頃と考えられる。なお遺構の主軸は掘立柱建物2・3とほぼ同じであることや位置関係から互いに関連性があるとも考えられる。

溝2-C(図版8) 調査区西側で検出された南北方向の溝で、途中からわずかに東へ振れる。西側肩部を溝2-Bと溝2-A、北部全体を溝2-Aで削剥され、南側は調査区外へと続く。

規模は長さ約13m以上、幅1m以上、深さ0.6m以上となり、残された東側肩部の断面形は隅丸の台形をなす。埋土は2分され、いずれも灰黄色系のシルト混り極細砂が堆積するが、水の流れた状況は観察されなかった。埋土からは少量の土師器や瓦器、輸入陶磁器類が出土した。それらには図15の66~70のような13世紀後半から14世紀初頭までのものが含まれる。

### 室町時代

柵2(図7) 調査区中央からやや北の位置で検出した。東西に並ぶ柱穴3基からなる2間分、長さは2.4mを検出した。主軸はほぼ東西となり、柱間寸法は東より1.5m、0.9mと揃わない。

掘形の形状は整わない円形で、大きさは直径0.3~0.4m、断面は皿形から隅丸の矩形、深さは0.1

～0.3mとなる。これらのうち西側の2基では直径0.2m前後の柱痕を確認した。

出土遺物がないため時期は不明であるが、2018年調査区で確認されていた柵4を西側に延長した位置に軸をほぼ同じくして連なり、規模や柱間寸法も近似することから、同一遺構の延長部を検出したと考えられる。ここから判断するならば、建物3の西妻側から約2間半離れた位置で柵2が途切れること、今回を含めた総延長が21m以上となることが判明する。

**溝2-B**（図版8） 調査区南西部で確認した南北方向の溝である。そのほとんどを溝2-Aによって削剥されるため、長さ5.8m以上、幅1.8m以上、深さ0.8mの規模を知れるのみとなり、遺存する箇所を見る限りにおいては溝2-Cと相似形をなすようである。

残された東肩はゆるやかな「U」をなし、溝底は比較的平坦で、ここから肩部へ移行する箇所では直径30cm程度の樹根のみとなった立木2本を確認した。埋土はシルトや粘土を交えた極細砂を中心とし、下位に行くにしたがい青灰色の度合いを増してグライ化が進行する。また中位には15層のように植物遺体の薄層を夾雑する層準も観察され、さらにその下位には藍鉄鉱も生成されることから、燐分などが集積する湛水した環境にあったことをうかがわせる。

遺物は各層準から破片となって出土した。種類には土師器、須恵器、瓦質土器、焼締陶器の備前焼、輸入陶磁器の青磁がみられ、いずれも細片となっているため全形はうかがえない。うち備前焼は口縁部の形態などから15世紀初頭に位置づけられ、瓦質土器の播鉢が15世紀後半から16世紀、青磁にはいわゆる細蓮弁文が施されているため15世紀末から16世紀前半の龍泉窯系製品に位置づけられ、ここから溝の埋没時期は16世紀前半代と考えられる。

**土坑5**（図8） 調査区北端部の中央からやや西に寄った位置で検出された。溝3埋没後に掘り込まれ、北半を溝1によって削剥される。残された部分から推定される平面形は円形と推定され、規模は東西0.6m弱、南北0.3m以上となる。深さは約0.2m、断面形は隅の丸い矩形で、坑底にはわずかな凹凸が観察される。埋土は2層に区分され、灰色系のシルト混り極細砂が堆積する。

出土遺物がないため時期を明らかにすることができないが、他の遺構との重複関係から平安時代後期以降、江戸時代以前に位置づけることは可能で、鎌倉時代までさかのぼる余地も残される。

**土坑35**（図8） 調査区中央の東側壁際で検出された。平面形は南側がわずかに突出する楕円形をなす。規模は東西0.9m強、南北1.0m強、深さは0.6m強となり、断面の形状は隅の丸くなったいびつな逆台形となる。埋土は3層に細分され、中位には地山掘削に伴って排出された土塊が団粒状をなして含まれていたことから、埋没過程のある段階で埋め戻されたと考えられる。

時期については出土遺物に瓦器碗口縁部片が含まれていたことから、大まかには中世以降に位置付けられるが、より詳細については遺存状況の悪い小片であるためこれ以上知ることができない。よってさきほどと同じく、鎌倉時代までさかのぼる可能性も考えられる。

## 江戸時代

**溝1**（図9） 調査区北端で検出した。北側の肩を含め多くの部分が調査区外となる。東西方向の溝として報告するが、北西隅が湾曲しており、この状態のままさらに調査区外へと続くのか、現

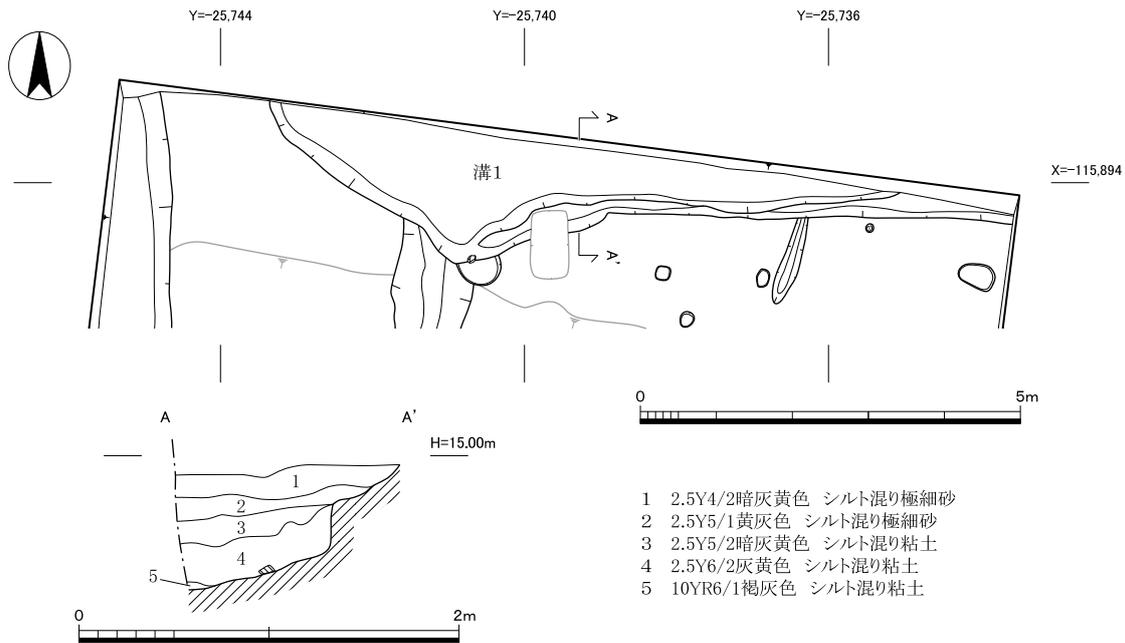


図9 溝1実測図（1：100、1：40）

状のまま途切れるのか判断できない。規模は幅1.5m以上、長さ10.0m以上、深さはもっとも広い部分で約0.6mである。断面は上位がゆるやかな皿状をなし、中ほどからはほぼ垂直に角度を変えてゆるやかに傾斜する底部へと至る。埋土は5層に細分され、下位にはシルトを交えた粘土が堆積しているため、一時期湛水する状態にあったことをうかがわせる。出土遺物には土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、東播系須恵器、焼締陶器の常滑焼・備前焼・信楽焼、瓦がある。このほかに糸切底を持つ耳皿や、京・信楽系陶器も含まれていたが、いずれも細片化し図化困難であった。なお、熔解炉の破片1点（図版16-土2）が含まれていることが特筆される。遺構の時期は出土遺物に中世後期までの資料が目立つものの、京・信楽系陶器や近世の瓦が含まれていることから18世紀代に位置付けられる。

溝2-A（図版8） 調査区西端を南北方向に貫くように検出された。西肩は調査区外となるため現状での最大幅1.4m、深さ0.9mとなる。断面形は東肩部のみの観察では隅丸の逆台形をなす。溝底はほぼ平坦で、標高は北が14.2m、中央が14.0m、南が14.1mで湧水がみとめられた。

堆積層は南へ行くに従い複雑化し、6層以下はグライ化が進行するとともに、堅果類や植物遺体の薄層を葉理状に含む層が堆積していた。これらの層準には藍鉄鉱も観察されたため、当時の周辺環境は樹木が繁茂し、燐分などを含んだ水が流入して溝に滞るような状態であったと推定される。

遺物は主に北半の埋土中位から出土し、図17～19に示す古代から18世紀半ば以前までの肥前陶磁器類や棧瓦など多種多様なものがみられる。中でも土製品（図20-土1）は刃入の素地に緑青が付着することから青銅製品の鑄造に用いられた坩堝で、周辺で鑄造が行われたことを示す具体的資料となった。

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要 (表3)

今回の調査では整理コンテナにして17箱の遺物が出土した。その内容は量の多い順に土器類、陶磁器類、瓦類、土製品、石製品となる。うち過半数は江戸時代の溝2-A出土の肥前や瀬戸・丹波・備前焼の国産陶磁器類や土師器、瓦類で占められ、続いて溝44・50出土の壺や鉢、高杯などの弥生土器、溝3出土の瓦器の椀や小皿、白磁の椀や四耳壺などの輸入陶磁器類の順となる。

このほか平安時代前期以降の須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器B類、瓦が出土したが、それらすべては、後世の遺構に破片となって混入した状態で、その量もごくわずかである。

### (2) 土器類 (図10～18、図版15・16、付表1)

#### 1) 弥生時代後期の土器

**溝44出土土器** (図10 1～5) 5点を図化した。いずれも小片となり器面の剥離も激しく詳細を知り得ない。4・5は壺の口縁部、1と2は甕、3は壺ともみなされるが不分明である。

時期は壺の口縁部の形状や1の内面に残された蜘蛛の巣状のハケから後期に位置づけられる。

**溝50出土土器** (図10・11、図版15 6～18) 13点を図化した。うち6～15は埋土中位からまともに出て出土した土器、16～18はそれ以下の層準から得られたものである。

6と7は受口状口縁となる鉢である。双方ともほぼ完形に復元された。双方の間には大きさと口縁端部の形状にわずかながらの差異があるものの、用いられる胎土や、底部から体部にかけての部位に観察される胎土接合面の広さ、外面調整のハケの方向と単位、用いられる施文具の条数と施文

表3 遺物概要表

| 時代   | 内容                            | コンテナ箱数 | Aランク点数  | Bランク箱数 | Cランク箱数 |
|------|-------------------------------|--------|---|--------|--------|
| 弥生時代 | 弥生土器                          |        | 弥生土器18点                                       |        |        |
| 平安時代 | 土師器、須恵器、瓦器、山茶椀、灰釉陶器、輸入陶磁器、石製品 |        | 土師器21点、須恵器2点、瓦器11点、山茶椀2点、灰釉陶器1点、輸入陶磁器7点、石製品1点 |        |        |
| 鎌倉時代 | 須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器             |        | 須恵器1点、瓦器4点、焼締陶器1点、輸入陶磁器5点                     |        |        |
| 室町時代 | 土師器、瓦質土器、焼締陶器、輸入陶磁器           |        | 土師器3点、瓦質土器2点、焼締陶器2点、輸入陶磁器3点                   |        |        |
| 江戸時代 | 土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付磁器、瓦、土製品      |        | 土師器5点、焼締陶器4点、施釉陶器9点、染付磁器6点、瓦2点、土製品2点          |        |        |
| 合計   |                               | 26箱    | 112点 (10箱)                                    | 0箱     | 16箱    |

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より9箱多くなっている。

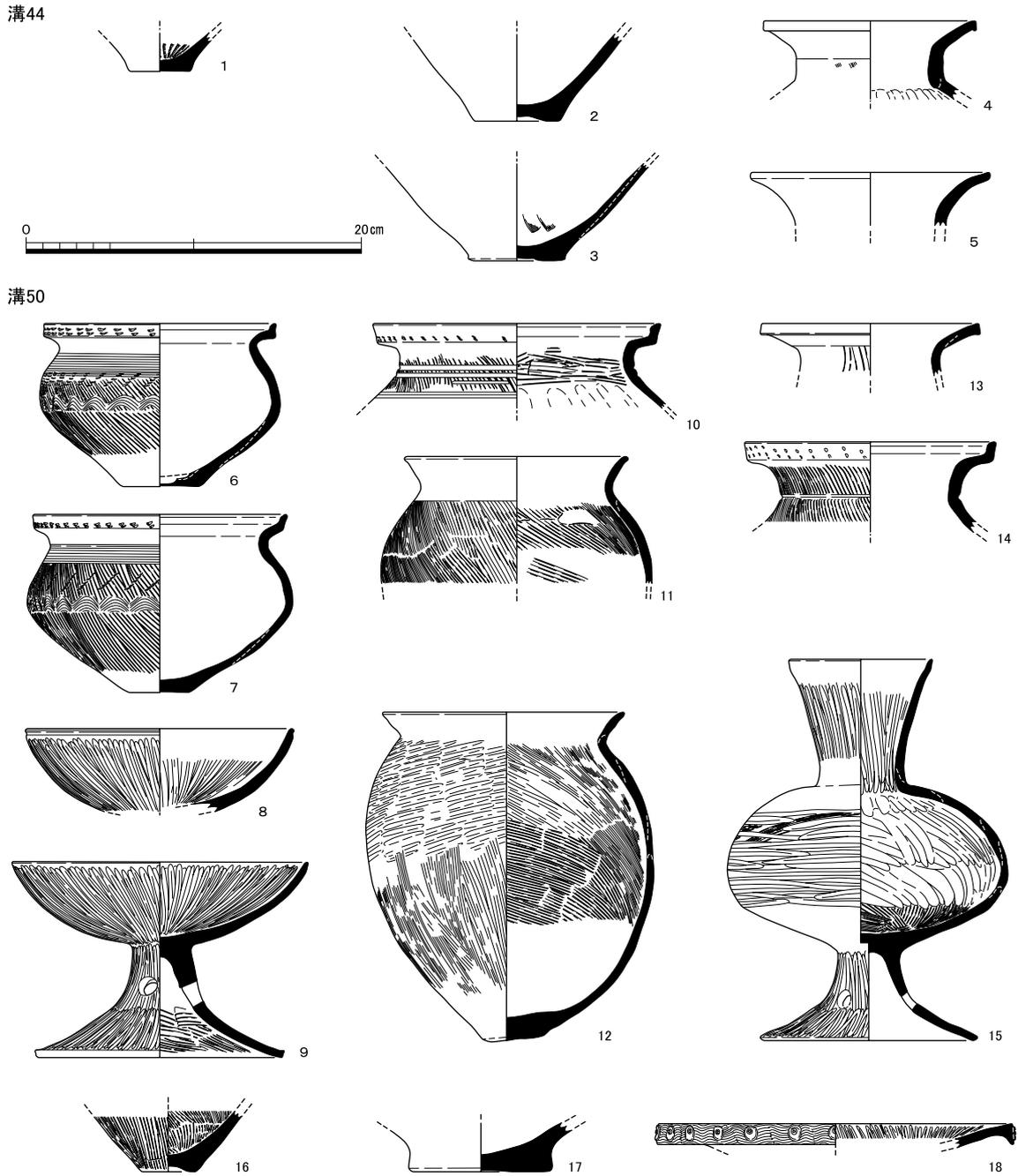


図10 溝44・50出土土器実測図（1：4）

される位置と文様種、さらには施文の癖ともとらえられる所作までが酷似しており、同じ製作者が時を経ずして製作したことを想定させる。底部は強い被熱により表面が剥離するとともに赤変し、体部下半から上位には煤の付着がみとめられる。

8と9は高杯で、このうち9は杯から脚部までと脚裾部とに分かれて出土したものが接合した。ともに椀形の杯部をなし、器面外側を丁寧な縦方向のヘラミガキで整える。

10～12は甕で、口縁部が受口状に形作られる10と外反させて整形される11・12の別がある。12は唯一全形のうかがえる資料で、1点のみが完形の状態で横倒しになって出土した。調整は内面が斜め方向のハケ、外面には右上がりのタタキを施したのちに縦方向のハケで仕上げられる。

13～15は壺である。口縁部の形状から、外反するもの、受口状になるもの、直口するものに分けられる。これらのうち15は口縁部から脚部にかけての部位が完形のまま倒れた状態で出土し、そこからやや離れた位置から検出された脚裾部片と合致した。



図11 土器15（左）と2018年調査区出土土器（右）

この土器15については、東側の2018年調査区で検出された上流側の溝234から出土した報告書21ページの図19～21の土器と大きさ、細かな形態的要

素、胎土が極めて類似するうえ、体部内面下半に施される斜め方向のハケ、頸部内面下半に施される縦方向のヘラミガキ、体部外面の横方向のヘラミガキ、黒斑の位置など製作手法すべての細部に至るまでが酷似しており、先述した鉢と同様に、あたかもひとりの製作者が時を経ずして製作したかのように見受けられる土器である（図11）。

16は甕の底部片である。内外面に施された粗いハケの様相より、近江からの影響を受けたとも考えられる。

18は器台の受部片である。端面には振幅の小さい櫛描波状文をめぐらせたのちに円形浮文貼付し、その中に竹管文を施すことにより装飾性を高め、内面は丁寧な縦方向のヘラミガキを放射状に施す。これらは形態や調整からみて弥生時代後期でも後半に位置づけられよう。

なお、壺17は底部の形態からみて弥生時代後期には位置づけられず、中期段階にまでさかのぼるものである。胎土に角閃石を多量に含むこと、茶褐色であることから生駒山西麓部の製品とみなされる。周辺にこの時期の遺構が存在していたことを示唆する断片的資料とも考えられる。

## 2) 平安時代の土器

溝3出土土器（図12・13、図版16 19～60）種類には土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器の別がある。19～39に図示した土師器のうち21～28は小皿である。口縁部の形態より21～24の口径9cm前後の「て」字状口縁を形作るもの、25～27の内湾あるいは外反させるもの、28のコースター形となるものの別がある。29～38は口径15～18cmの皿である。口縁部の形態はやや外反させるものと内湾させるものとに大別され、いずれにも外面に施されるヨコナデが二段となる資料が多い。

19と20は高い高台を付した破片で、この段階の土器群に含まれる例として示した。39については器面の剥離がはなはだしく詳細は不明だが、形態からみて奈良時代にまでさかのぼる杯と考えられ、調査地周辺の動態を得る手掛かりとして図示する。

40～50は瓦器である。器種には40・41の小皿、42～50の椀がみられる。2点の小皿は口縁部の形態に小差がみられるものの直径10cm弱、高さ2cm程度とほぼ同様に、口縁部内外面に施される

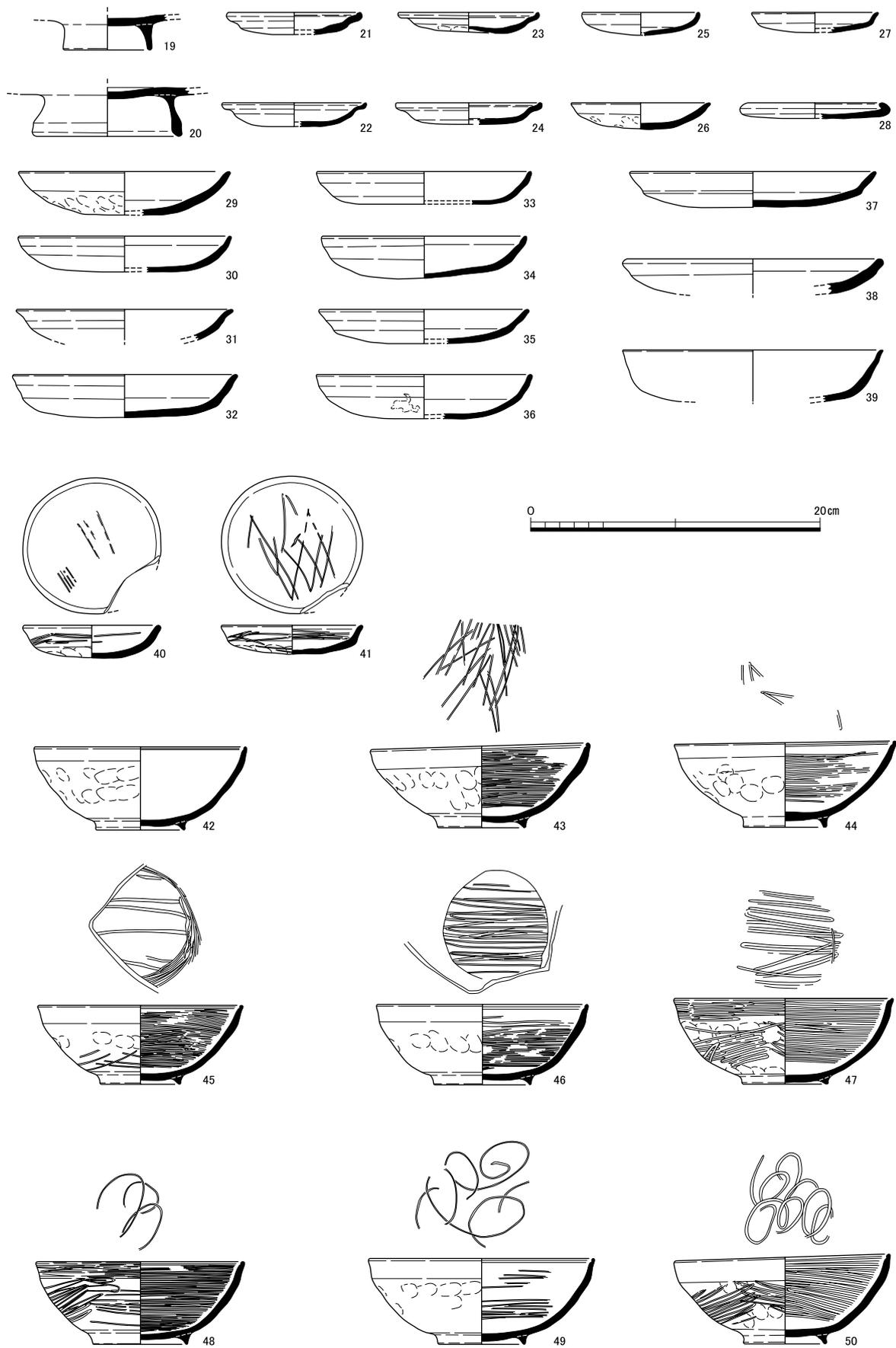


图12 沟3出土土器实测图1 (1:4)

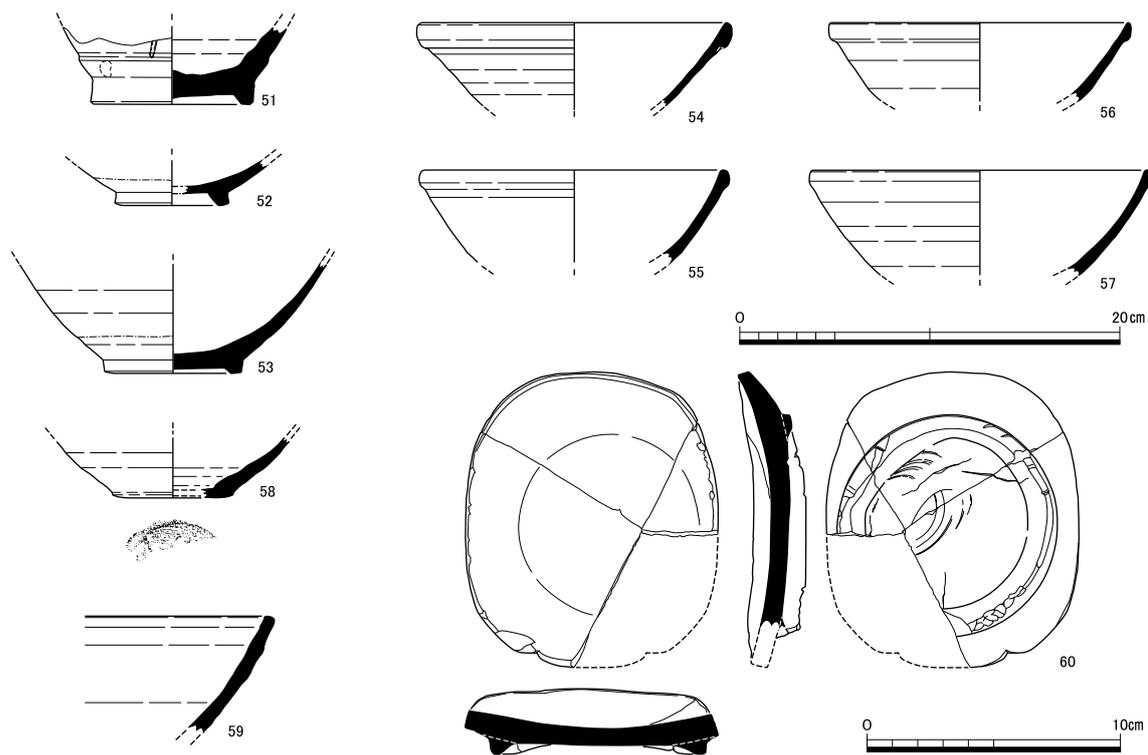


図13 溝3出土土器実測図2（1：4、60のみ1：3）

ヘラミガキの範囲と密度も近似している。相違点は見込みの暗文が平行線と斜格子状となる点である。42～50の椀9点は口径15.0cmからやや小さめ、高さ6.0cm程度、高台径が6.0cmを中心とし、断面が三角形状となることで同様である。調整は内面が平行線状に非常に密で、外面が図上では外面腰部のヘラミガキに粗密があるように示されるが、これは器面の遺存状況によるもので、基本的には口縁部が横方向に密、腰部は分割しながら円弧状をなして全面に施されることで共通する。相違点は見込みの様相で、43や44の斜格子状、45～47の平行線状、48～50の連結輪状に施されるものの3種類に区分される点である。これらの諸様相に加え、口縁端部内面にめぐらされる沈線の特徴から、椀は樟葉型に分類され、法量やヘラミガキの状況、高台の断面形から勘案して、その時期を11世紀末から12世紀初頭頃に位置づけることができる。

また、共伴する土師器は30のような口縁部に二段ナデを施しながらも内湾気味に仕上げられる資料が含まれることや、「て」字状口縁の小皿が一定量存在すること、直径9.0cm程度のコースター形の小皿が伴うことから、中世京都の4C～5A段階<sup>1)</sup>に位置づけられ、これと瓦器椀の年代観との間に齟齬はない。

51～57は華南沿岸湾窯系の白磁である。これらのうち、51は四耳壺の底部から腰部下位の破片で、外面には一条の縦位の刻線が施され、底部高台内には墨痕のような黒ずみが観察される。当該器種としては、比較的早い時期の例である。52～57は椀の底部と口縁部の破片で、52と53はⅡ類、それ以外はⅣ-1類となり、玉縁の形態より11世紀末から12世紀代に位置づけられる。

58と59は東播系須恵器の椀と鉢である。椀の底部外面には回転糸切り痕跡が確認される。鉢の外面には重ね焼きの痕跡をとどめるが、内面には全面に降灰釉が観察されることから、最上段に置

かれて焼成されたと判断される。口縁端部が肥厚していないことや、端部に面が形成されていないことから12世紀初頭までの古い段階に位置づけられ、搬出初期段階の一例を付け加えた。

60は山茶碗の底部片を加工し硯として仕立てたもので、見込みは使用により滑沢を帯びる。周縁は隅丸長方形様に研磨し、陸側には木瓜形の刻り込みを加える。高台は刃器により海側を切削することにより低め、正置した際にその方向へ傾かせて墨汁が溜まりやすいよう配慮されている。当該期の転用硯としては類例の少ないものとする。

### 3) 鎌倉時代の土器

土坑45出土土器（図14 61～65） 瓦器2点と輸入陶磁器3点の合計5点を図化した。

輸入陶磁器には61と62の青磁の小皿、63の白磁の碗がある。青磁のうち、61には見込みに猫掻手の櫛描文が施されるため同安窯系、62は磁胎や釉調から龍泉窯系の製品とみなされる。63は玉縁の肥大した華南沿岸湾窯系白磁で、IV-1類に分類される。

64と65は瓦器の碗で、ともに半球状の体部となり内面にはまばらな暗文が施される。全体の形が知れる65には矮小化した断面偏平な三角形の高台が付され、見込みには、左右に反復させながら平行線状の暗文が間隔をあけて施される。この様相に器形および口径、高台の径と断面形を加味して考えた場合、樟葉型に分類され、時期を13世紀中頃に位置づけることが可能となり、この年代観はともに出土した輸入陶磁器のそれとも矛盾は生じない。

溝2-C出土土器（図15 66～70） 出土遺物のうち、瓦器の碗、東播系須恵器の鉢、焼締陶器の古瀬戸の壺、輸入陶磁器の白磁の皿と青磁の碗の計5点を図化した。

66は輸入陶磁器の口禿口縁の白磁皿である。67は底部から腰部にかけての部位が遺存する青磁碗の高台から腰部にかけての破片で、内外面には櫛描による文様が描かれる。器形や釉調、施文の

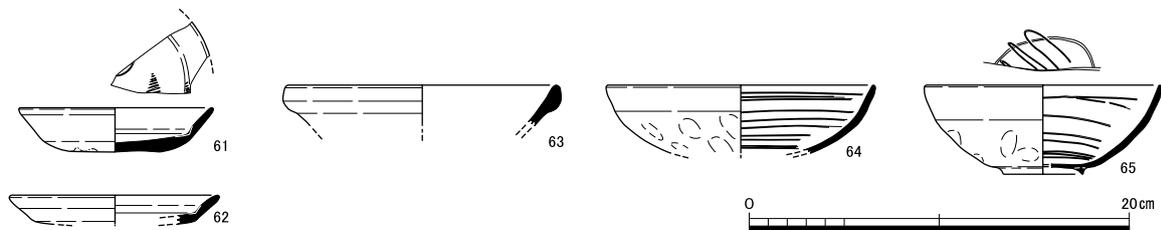


図14 土坑45出土土器実測図（1：4）

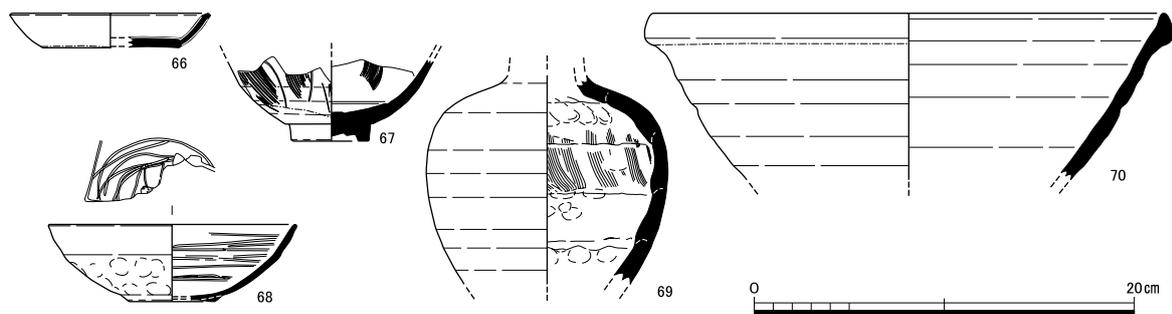


図15 溝2-C出土土器実測図（1：4）

様相から同安窯系青磁の椀のⅠ類に分類される。

68の瓦器椀は口径13.0cm、器高4.1cm、底部には矮小化して痕跡程度となった高台が付され、用いられる胎土は体部とは異なり砂粒を多く含む粗い素地が用いられている。

69は古瀬戸の壺の肩から胴部にかけての破片で、外面には全面に釉が掛かり、内面には粘土紐接合痕を明瞭に残す。70は東播系須恵器の鉢で、口縁部は下方にやや拡張され端面は丸みをおびる。

これらの遺物は、総体として13世紀後半から14世紀初頭に位置づけられる。

#### 4) 室町時代の土器

溝2-B出土土器(図16 71~80) 10点を図化した。種類には土師器、須恵器、瓦質土器、焼締陶器の備前焼、輸入陶磁器がある。71~73は土師器である。うち71は小皿で、口径6cm、器高1.5cmとなる小型のものである。72と73は皿で、やや外反しながら上外方へ広がる口縁部を形作る。ともに口径約15.0cm前後、器高3.0cm弱となり、このうち72は精良な胎土を用いて丁寧に仕上げられた精製品である。

74は瓦器椀の口縁部から体部にかけての破片で、遺存状況が悪いため詳細は不明ながら口径と器形から13世紀後半頃のものと考えられる。

75と76はともに龍泉窯系青磁の椀で、75にはいわゆる細蓮弁文が施され、その様相から15世紀末から16世紀前半代に位置づけられ、76の椀は小片ながら形態と釉調から龍泉窯系の製品である。

77は平安時代の山茶椀で74と同様、前代の遺物が混入した資料である。

78は焼締陶器の備前焼の播鉢で、小片ながら口縁部の形態からみて15世紀前葉までのものとみなされる。

79と80は瓦質土器で、前者は盤に分類され詳細な時期は不明ながら、形態からみて樟葉の製品であると考えられる。80は播鉢で内面には7条一対の播目が間隔をおいて刻まれ、外面には幅の広い工具を用いたカンナケズリ状の擦痕が観察される。形態や特徴から15世紀後半から16世紀にかけての所産にかかるものとしておきたい。

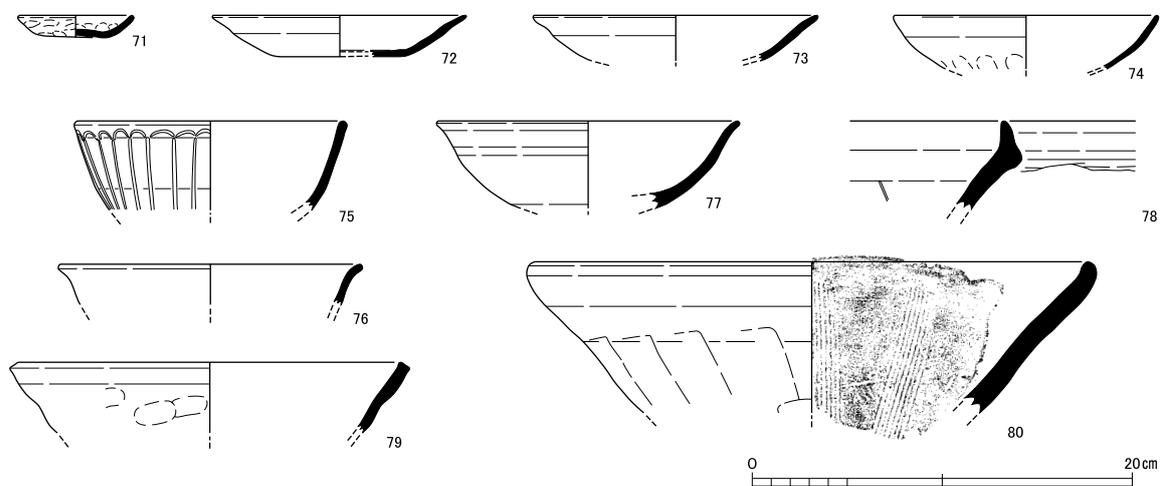


図16 溝2-B出土土器実測図(1:4)

以上の土器類は74と77のような明らかな混入品と詳細不明なものを除けば、おおむね15世紀から16世紀前半代におさまるものと考えられる。

## 5) 江戸時代の土器

溝2-A出土土器(図17・18 81~107) 量的には今回の調査でもっとも多く、その中から27点を図化した。種類には土師器や肥前産陶磁器類、京・信楽系陶器、焼締陶器の丹波焼、瀬戸焼や瓦類が含まれ、その他、先述の溝2-Bと同様に混入品とみられる灰釉陶器や焼締陶器の常滑焼・丹波焼、堺明石系の製品や輸入陶磁器がある。また特殊なものに埴塙があり、これについては項を改めて詳述する。

81~86は肥前の磁器である。器種には81~83の椀、84~86の皿がある。81は外面に山水を描いた端反の椀で、82には梅花、83には崩れた万字文を口縁部、簡略化した山水を胴部に表す。82は見込みに蛇の目状の釉剥ぎがみられるいわゆるくらわんか手の製品である。84~86は直径15.0cm前後の五寸皿である。内面には84の二重の斜格子文と圏線、85の草花、86の薊とおぼしき花の文様が描かれている。なお、86は外面の口縁部と体部、さらに高台脇に圏線を巡らせる点で他と異なり、84の見込みには蛇の目の釉剥ぎが行われる。

87~90は施釉陶器である。87は全形の知れる京・信楽系の椀で、外面には緑色釉により菊花文の上絵付が施される。88は丹波焼、89は信楽焼である。88は腰から体部が筒状となる瓶である。外面高台脇まで鉄釉が掛けられ、暈付から底部内面は露胎となる。89は壺の底部から腰部にかけての破片で、外面下半部まで鉄釉が掛けられる。90は瀬戸焼の鉢の底部で、腰部下端まで施釉し、底部内外面には粗い粒による砂目積が観察される。

91~95は肥前の陶器である。91は底部から頸部までが遺存する瓶で、重心の低い腰部から肩の張った筒状の体胴部、突帯状の装飾をめぐらせた細い頸部をもつ。底部外面は露胎で、重ね焼き痕が観察され、体部外面には刷毛状の工具で白化粧土を横に引き、その上から鉄釉を掛け流す。93は甕の口縁から胴部上位の破片である。口縁端部上面は水平とされ、胴部は上位が直線状、以下は屈曲して肩が張る。遺存部位全体には刷毛塗された横方向の白化粧土がほどこされ、外面にはその上から鉄釉と緑釉による抽象的な文様が描かれている。92・94・95は鉢である。92は底部から腰部の破片で、外面には高台脇まで鉄化粧を施し、腰部から上位にかけては白化粧土が掛けられ、内面には白化粧土を刷毛塗している。94と95はともに大型の製品で、体部から口縁部にかけての形態はほぼ同じとなる。94の内面から外面上位には白化粧土が横方向に引かれ、内面には部分的に鉄釉と緑釉が掛けられる。95は全形のうかがえる資料で、内面全体と外面口縁部に藁灰釉が掛けられ、内面上位の一部には鉄釉が流し掛けされる。底部には大きな焼き膨れが生じ、亀裂こそ確認されないが、見込みは半球状に大きく盛り上がり、外面はその部分を中心として焼成の状態が非常に悪い。これら5点のうち、95以外はいわゆる刷毛目唐津と呼称される製品である。

96は輸入陶磁器の青磁椀の底部片である。形態的には龍泉窯系の製品にもみえるが、焼成は完全な還元状態とはならず橙色を帯び、釉は濁り非常に薄く掛けられていることから16世紀前後の倣

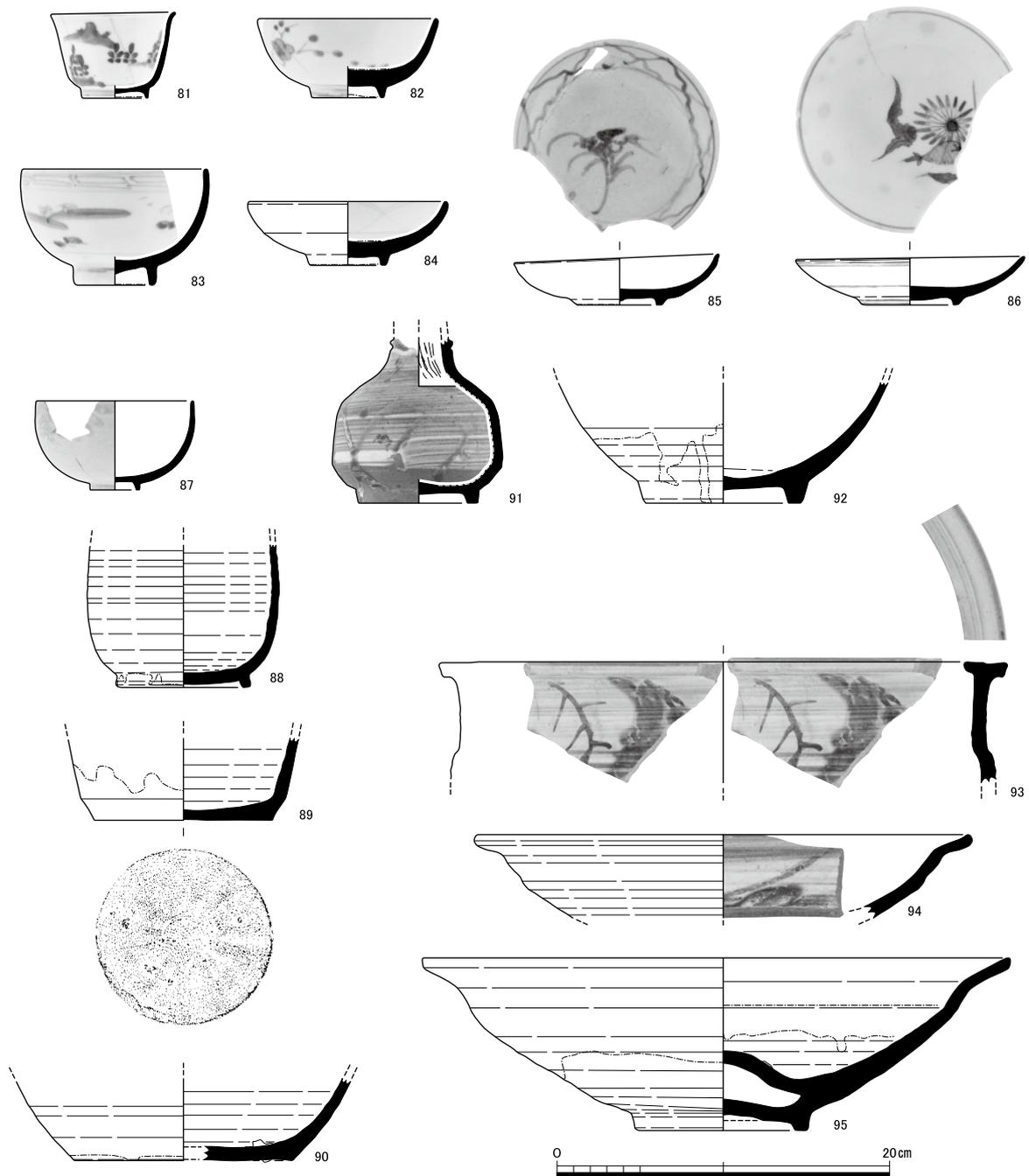


図17 溝2-A出土土器実測図1 (1:4)

龍泉窯系青磁と考えられる。97は灰釉の椀の底部片、98は焼締陶器の常滑焼の大甕口縁部の小片で、形態から15世紀前半頃に位置づけられる。以上3点の資料はこの遺構の時期とは異なるものだが、下久世構が調査地周辺に想定されていることや、それ以前の調査地周辺の様相を示す資料となる可能性も否定できないためここに取り上げた。

99~102の4点は焼締陶器の播鉢で、99は底部内面に圏線状の播目がないため信楽焼に分類される。100と101は丹波焼で、100は口縁部の形状から当該器種の最終段階に位置づけられ、101は6条一対の播目が間隔をあけて施されることや口縁部の形態的特徴から、100よりも古い16世紀後半から17世紀前葉にかけての製品で、先の96~98と同様に混入品の可能性がある。102は口縁部下

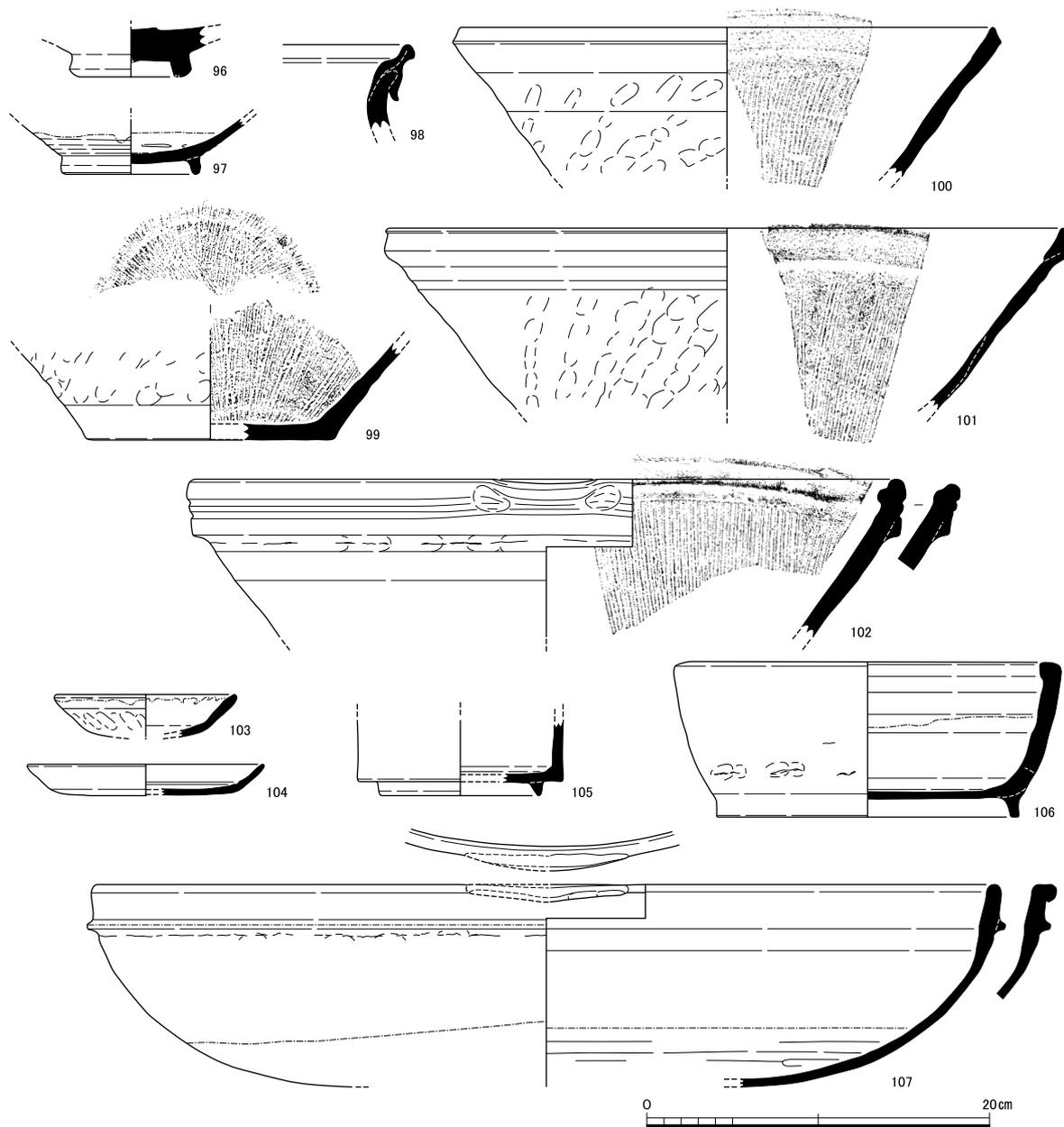


図18 溝2-A出土土器実測図2 (1:4)

方を三角形に肥厚させ、内面に密な挿目を施す堺明石系の播鉢である。

103～107の5点は土師器である。これらのうち103と104は小皿で、103の口縁部には炭化物が厚く付着するため燈明皿と考えられる。104は口径約7cmの小皿で、全体形や底部と口縁部との境に明瞭な段を持つため、近世京都の製品を模したとも考えられる。105と106は火舎である。105は円筒形の体部と平らな底部とからなり、底面やや内側には断面三角形の高台を貼付する。体部外面は光沢を帯びるほどの丁寧なヘラミガキが施され、一部には煤の付着がみとめられる。106は全形がうかがえ円盤状の底部からわずかに内湾する胴部との屈曲部に断面長方形の高台を付す。口縁端部は内側にやや肥厚させ、ここから下位には図示するように煤が付着する。腰部には粘土紐の接合痕が観察され、105より粗略となる。

107は底部を欠く焙烙である。直径50cmを超える大型品で、偏平な底部から上方へゆるやかに内

湾させながら立ち上がり直立気味の口縁部となる。口縁部から下がった位置には断面台形状の鍰をめぐらせ、口縁端部の一箇所にはやや外方へ張り出させるような形の片口が設けられる。内面底部付近は深い褐色を帯びた焦げが観察され、外面の鍰の下から腰部にかけては煤が付着し、竈に掛けられた痕跡を残していることから、その竈の掛口の口径が40cm程度であったと知れる。

以上の遺物は、肥前磁器にみられる器種や文様、施釉技法から18世紀でも半ばにまでは下がらないと考えられ、肥前陶器に大型製品が目立ち、底から腰にかけての部位が土みせの状態となる製品が多いこと、白化粧土を施す資料が多数を占めることや釉の掛け分け技法から18世紀代に位置づけられること、100の丹波焼播鉢の時期が18世紀中頃までであることから、全体的には18世半ばまでには至らない段階の一群と考えられる。

### (3) 瓦類 (図19、附表2)

軒棧瓦 (瓦1・2) 溝2-Aから出土した2点を図化した。瓦1は瓦当右脇に角切りが観察されるため小丸付軒棧瓦である。瓦2には小菊瓦が付されていないことから鎌形軒棧瓦に分類される<sup>2)</sup>。いずれも瓦当文様は唐草文で草花あるいは種実を抽象化した図柄を中心に置き、その両脇に簡略化した唐草を外向きに二回反転させる意匠を持つ。顎の形状が段顎となることも共通し、瓦当面に離型材として白雲母の粉末、いわゆるキラコを撒布している。

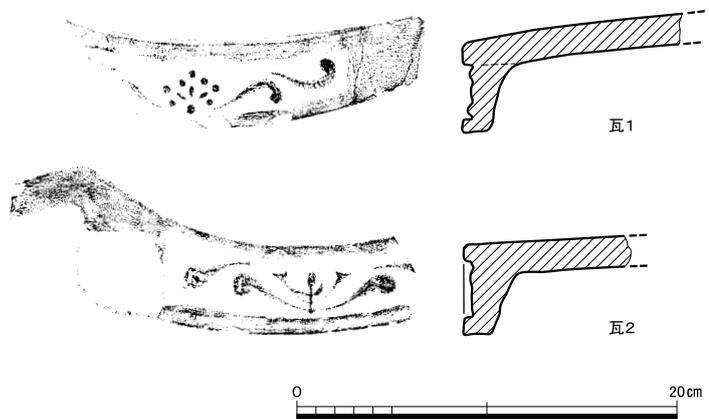


図19 出土瓦拓影及び実測図 (1:4)

### (4) 土製品 (図20、図版16、附表2)

埴塼 (土1) 溝2-Aから出土した。上下端を欠損するため全形は不明だが、内径20cm程度の円筒形に復元可能である。器壁の厚さ1cm前後に形作られ、内面には幅2cm前後の模骨状となった縦位方向の凹凸が8条以上観察される。素地には苧と小礫が混和され、器面の外側全面にはイネ科植物の圧痕を観察することができる。器面は上位が還元状態の灰色をなし、下位はこれに黒緑色を帯びたガラス質の溶融物が付着する。内面の上位は還元状態の

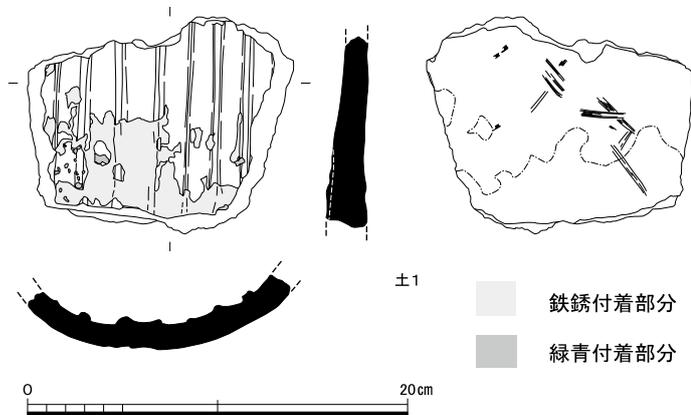


図20 出土土製品実測図 (1:4)

灰色となり、下位には鉄分が付着し、その中の各所には図示するような形で各所に粒状となった緑青の付着が観察される。以上の様相から、青銅を熔解した坩堝と考えられ、溝1と同様に、周辺において、青銅製品の鑄造など金属加工にかかわった集団が存在していたことを示す資料である。

**熔解炉(土2)** 溝1から出土した。小片となり上下の位置も不明であるため写真で報告する。長辺10cm、短辺6cm程度の破片で、表面が溶融してにぶい赤褐色のガラス質となる。それより内側は灰色を帯びた還元状態で発泡する部分が約1cmの厚さで観察され、これが高温にさらされた状況によって生成されたものと考えられること、その裏側に籾殻や苧を多数交えたオリーブ黒色のシルト質の素地が観察され、これが真土とみなされることから熔解炉の破片と判断される。前者と同様に近辺で金属の熔解を伴う鑄造などの作業が行われていたことの証左である。

### (5) 石製品 (図21、附表2)

**砥石(石1)** 溝3から出土した。下端を欠き、上端部には火熱による黒変が認められ、その状況は軽微ではあるが正面左半側にも及んでいる。形状は上面が長方形となり、側面は上面側から半裁したような紡錘形状をなす。裏側は蒲鉾形状となり原礫面を残したままの状態、断面形は隅の丸い逆台形状となる。上面は流理と平行し、この面がもっともよく使用されたため平滑となっており、両側面も上面ほどではないが砥面として使用されているが、上面ほどは平滑とはならず粗い線条痕が目立つ。色調は灰白色で、用材は流理状組織の発達した流紋岩と思われる珪質の転石である。

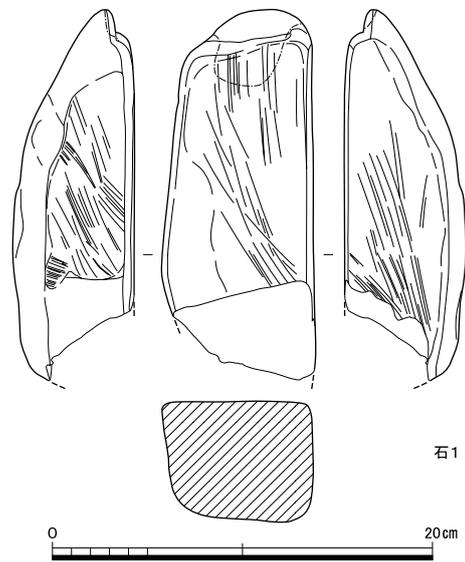


図21 出土石製品実測図(1:4)

註

1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

| 750年  | 840年  | 930年  | 1020年 | 1110年     | 1170年 | 1260年 | 1350年     | 1410年 | 1500年 | 1590年 | 1680年 | 1740年       | 1800年 | 1860年 |
|-------|-------|-------|-------|-----------|-------|-------|-----------|-------|-------|-------|-------|-------------|-------|-------|
| 1     | 2     | 3     | 4     | 5         | 6     | 7     | 8         | 9     | 10    | 11    | 12    | 13          | 14    |       |
| A B C | A B C | A B C | A B C | A B A B C | A B C | A B C | A B A B C | A B C | A B C | A B C | A B C | A B A B A B |       |       |

2) 杉本 宏「棧瓦考」『考古学研究』第46巻第4号通巻184号 考古学研究会 2000年

参考文献

森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社 1990年

日本中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年

『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念 九州近世陶磁学会 2000年

日本中世土器研究会編『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 2022年

## 5. まとめ

以上、今回の調査で得られた成果を報告した。大局的には既往調査成果を追認する形となったが、これを補強、あるいは新知見も得られたため、図22～25をもとにその内容を記す。

### 弥生時代

後期の溝2条が検出された。双方とも東側の2018年調査区で確認されていた溝の延長である。うち溝50は、検出された位置や遺物から溝234に続くことは確実で、さらに1997～1999年調査区で検出されたSD7につながる可能性もより高まった。これが正鵠を得たものならば、北東から南西に向かって直線的に開削された総延長60mに達する溝に復元される。遺物の出土した層準や状況も共通する部分が多く、特に長頸壺や鉢は同一製作者の手になるものを意図的に埋置したともみなされ、約100m東で行われた2016年調査区で検出されたSX2南西肩部の甕1点と鉢2点とを並置していた状況を含めて注意が必要である。

### 平安時代

調査区南半部で検出された掘立柱建物1は、今回の調査でも詳細な時期を明らかにできなかった。しかし、位置、主軸、柱筋、掘形の形状、埋土のいずれからでも、2018年調査区の建物1と密接な関係にあったことは確実視される。さらに、2018年調査区の建物1の東側で検出された柱列1も前記の諸様相と共通する部分が多く、これも掘立柱建物の一部として積極的に評価するならば、3棟の建物が互いに深い関連性を持って配置されたと考えられるとともに、南東側60m離れた位置の2001年調査区で検出された長岡京期とされる3棟が東西に棟を揃えて連なる掘立柱建物と近似する配置となるため、これらとの関連性も考慮しなければならない。

後期では溝3が検出された。出土遺物には12世紀初頭までに位置づけられる瓦器碗とともに東播系須恵器や輸入陶磁器のほか、当該期としては僅少な例となる転用硯が見られた。また硯以外は一括性の高い状況で出土し、この中に含まれる東播系須恵器の鉢は、口縁部の形態から始源に近い段階に位置づけられ、白磁の四耳壺も輸入開始後の早い段階の資料となる。

### 鎌倉時代

13世紀中葉の土坑のほか、小規模な掘立柱建物を検出した。末期には溝2-Cが埋没したと考えられる。まとまらないピット群を含めて遺構が東に偏在する傾向にあるため、その分布の中心はより東にあると考えられる。そのような意味においては溝2-Cが西辺を画する溝であったともとらえられ、下久世構に関連する蓋然性を視座に入れておかねばならない。

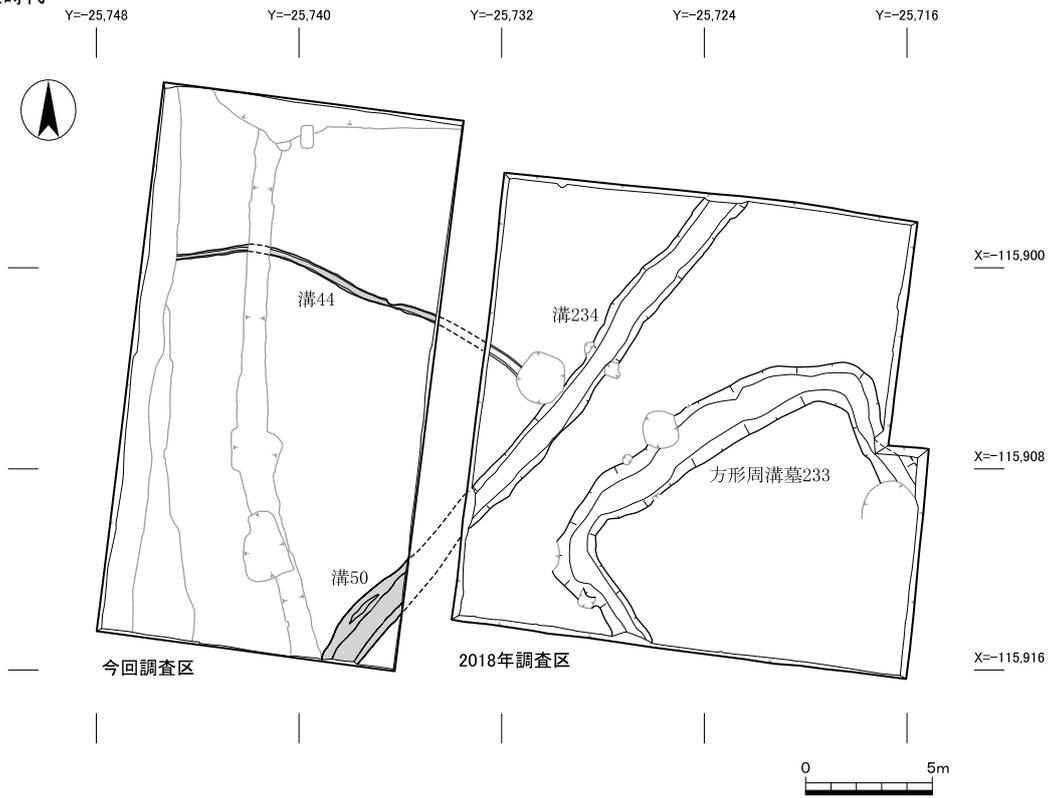
### 室町時代

前代からやや西に向かった位置に相似形をなすような形に溝2-Bが開削され、16世紀前半代には埋没する。相互の位置関係や平面形より前代の溝2-Cとの間に深い関連性があったと考えられ、前者と同じく下久世構に関連する堀となることも想定される。

### 江戸時代

前代からさらに西に移動した位置に溝2-Aが開削される。藍鉄鉢の生成により生活排水が流

弥生時代



平安時代

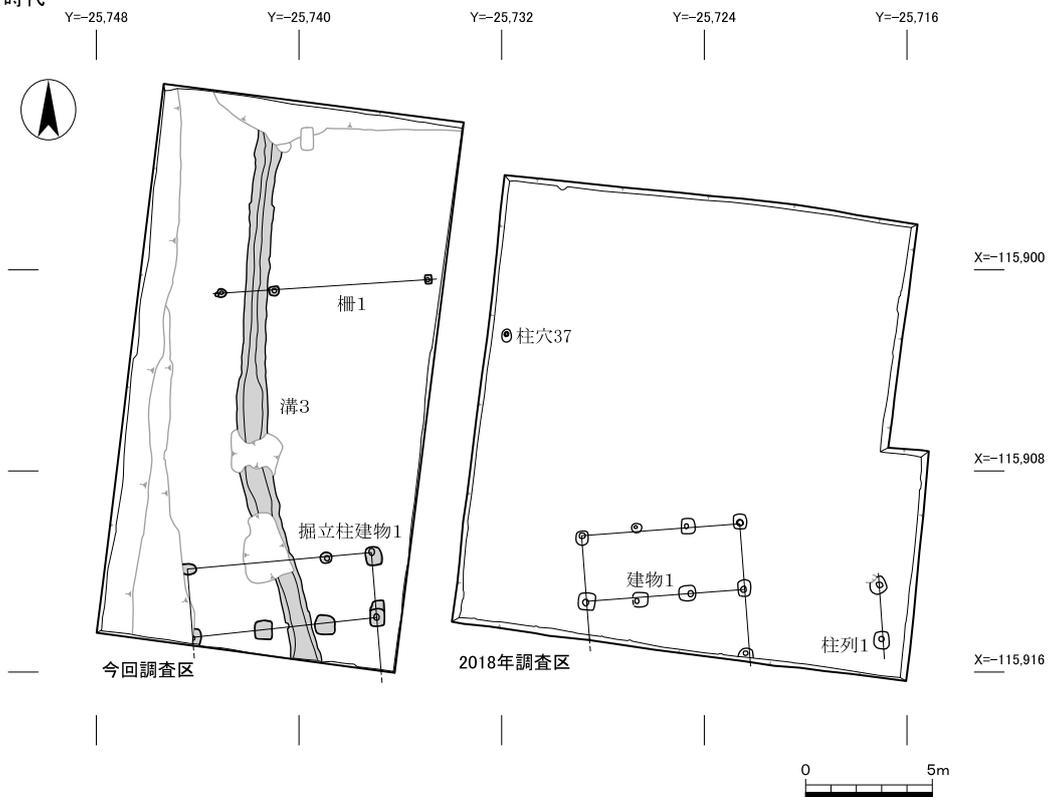
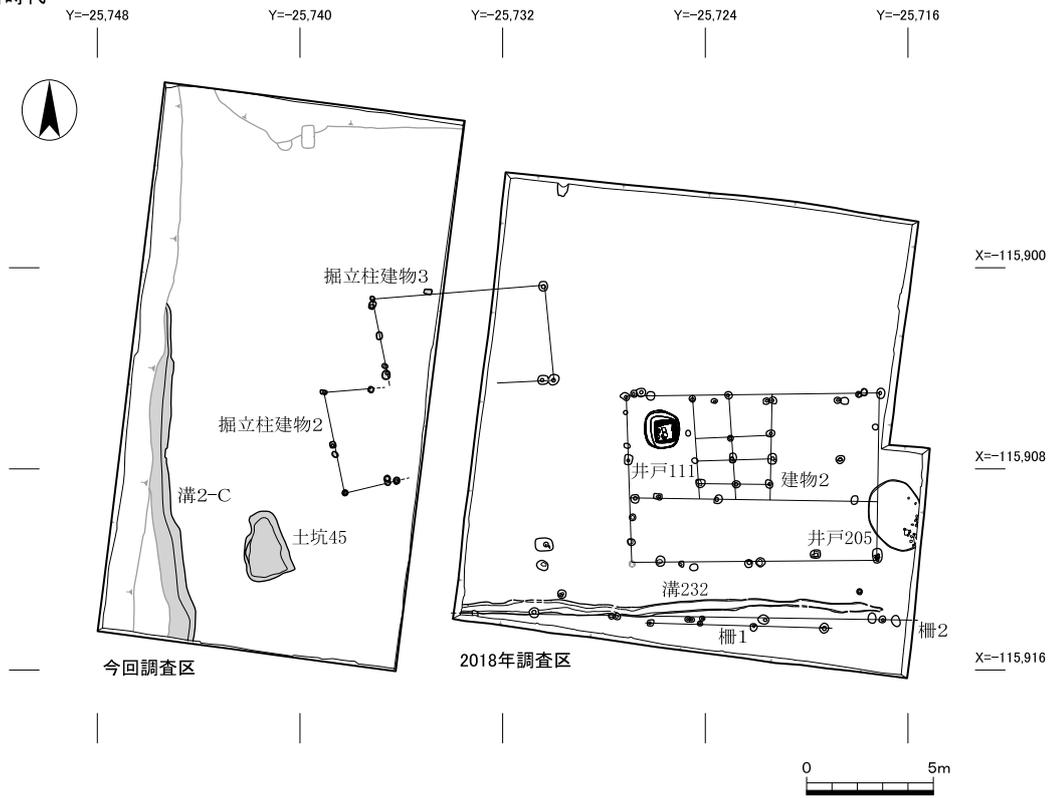


図22 遺構変遷図1 (1 : 300)

鎌倉時代



室町時代

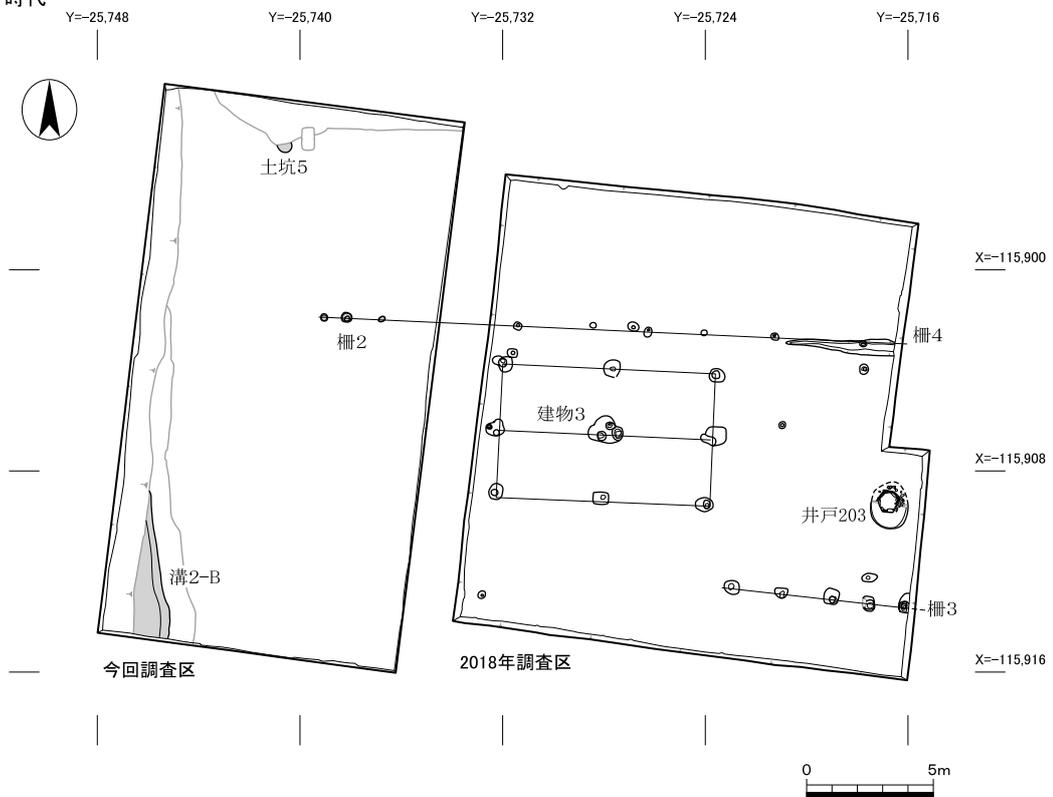


図23 遺構変遷図2 (1:300)

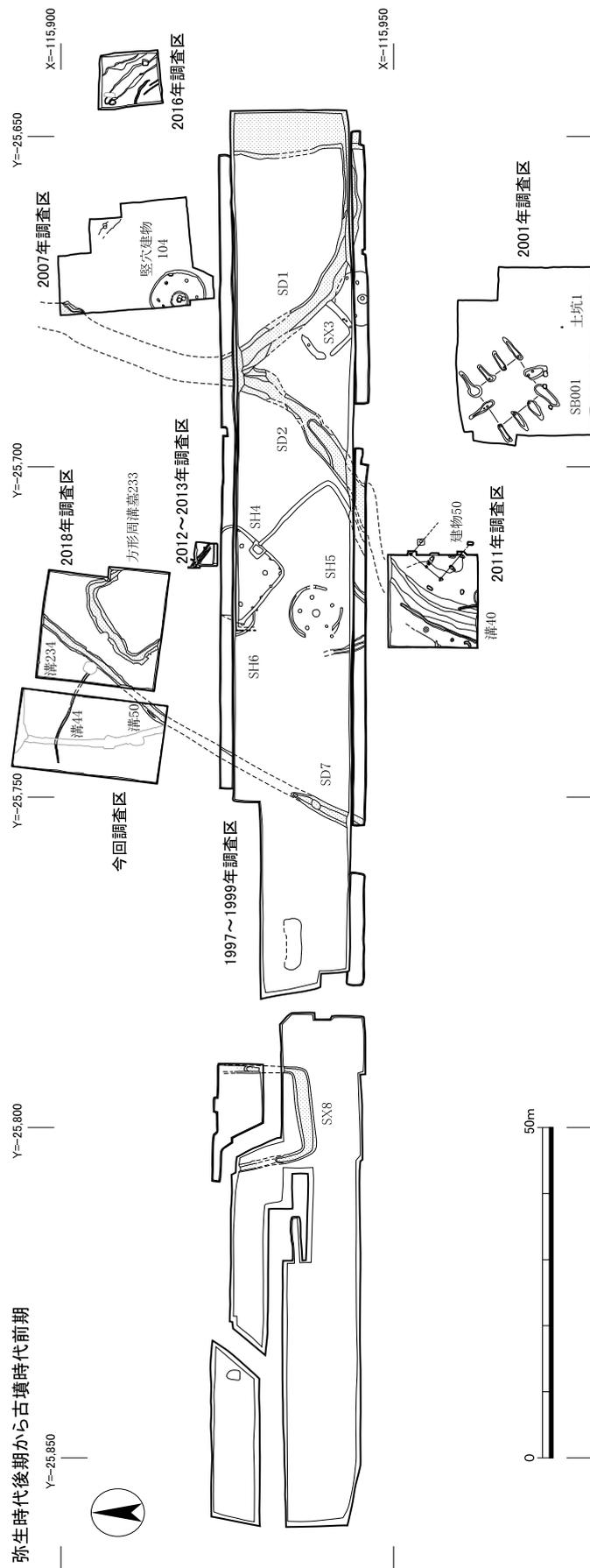


図24 周辺遺構変遷図1 (1 : 1,000)

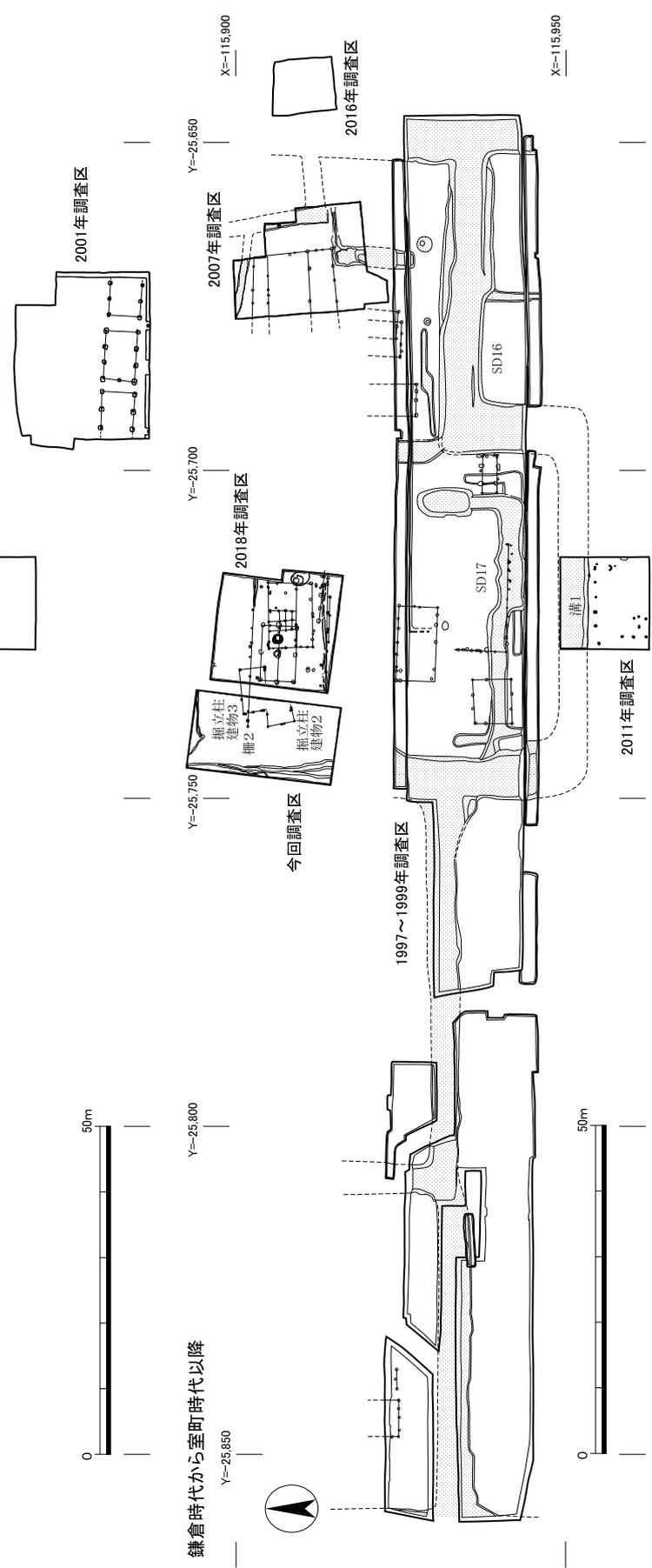
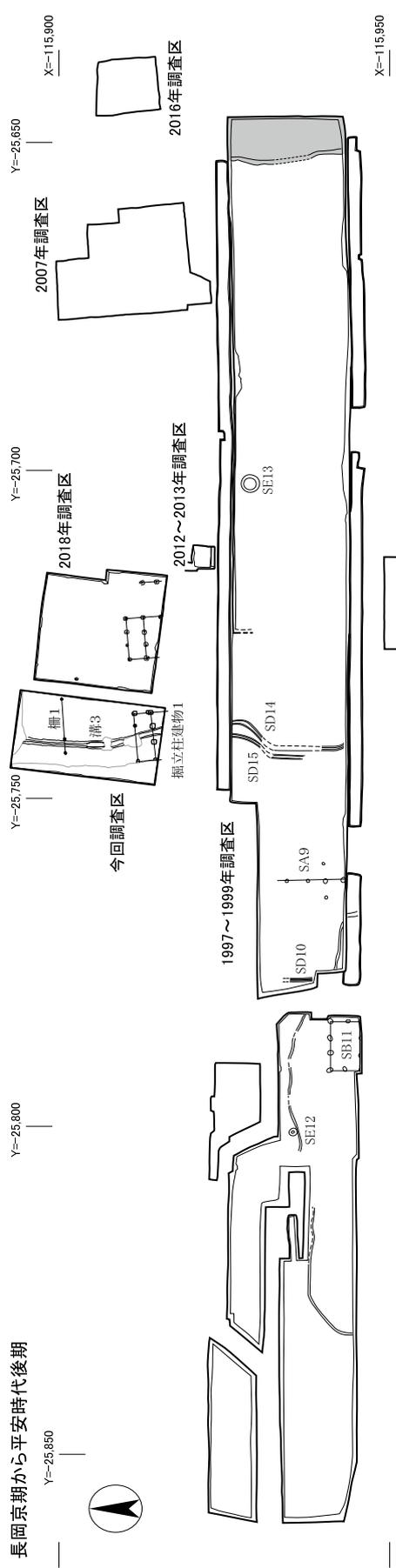


図25 周辺遺構変遷図2 (1 : 1,000)

入するような環境にあったと推定される。遺物には18世紀半ば以前のものが含まれるため、溝2-B・Cのほか下久世構関連遺物を混在させたとも考えられる。

なお、宝永2年（1705）以前の作成にかかるとされる『山村家文書』<sup>1)</sup>では、この位置に道が描かれるのみだが、この道の側溝あるいはこの時期以降に開削された溝であった可能性もあろう。

註

- 1) 中井和志「157 下久世構跡」『京都府中世城館調査報告書』第3冊 山城編 京都府教育委員会 2014年

付表1 土器類観察表

| 番号 | 器種   | 器形    | 出土遺構 | 法量(cm) |       |      | 色調             | 胎土          | 備考     |
|----|------|-------|------|--------|-------|------|----------------|-------------|--------|
|    |      |       |      | 口径     | 器高    | 底径   |                |             |        |
| 1  | 弥生土器 | 甕     | 溝44  | —      | (2.7) | 3.5  | 2.5Y8/2 灰白色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 2  | 弥生土器 | 甕     | 溝44  | —      | (4.9) | 5.0  | 2.5Y7/2 灰黄色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 3  | 弥生土器 | 壺?    | 溝44  | —      | (5.8) | 5.8  | 10YR8/3 浅黄橙色   | 石英・長石・チャート  |        |
| 4  | 弥生土器 | 壺     | 溝44  | 12.5   | (4.7) | —    | 7.5YR8/2 灰白色   | 石英・長石・チャート  |        |
| 5  | 弥生土器 | 壺     | 溝44  | 12.2   | (3.2) | —    | 7.5YR7/6 橙色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 6  | 弥生土器 | 鉢     | 溝50  | 13.7   | 9.8   | 4.4  | 2.5Y8/6 黄色     | 石英・長石・チャート  | 底部被熱   |
| 7  | 弥生土器 | 鉢     | 溝50  | 15.0   | 10.7  | 3.4  | 2.5Y8/6 黄色     | 石英・長石・チャート  | 底部被熱   |
| 8  | 弥生土器 | 高杯    | 溝50  | 15.8   | (5.0) | —    | 10YR8/1 灰白色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 9  | 弥生土器 | 高杯    | 溝50  | 17.6   | 11.7  | 14.5 | 10YR8/2 灰白色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 10 | 弥生土器 | 甕     | 溝50  | 17.0   | 5.1   | —    | 10YR8/2 灰白色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 11 | 弥生土器 | 甕     | 溝50  | 13.0   | (7.6) | —    | 10YR8/2 灰白色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 12 | 弥生土器 | 甕     | 溝50  | 14.3   | 19.8  | 3.7  | 10YR7/2 にぶい黄橙色 | 石英・長石・チャート  |        |
| 13 | 弥生土器 | 壺     | 溝50  | 12.8   | (3.1) | —    | 10YR8/2 灰白色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 14 | 弥生土器 | 壺     | 溝50  | 14.8   | (5.4) | —    | 10YR8/2 灰白色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 15 | 弥生土器 | 台付長頸壺 | 溝50  | 8.4    | 22.9  | 12.4 | 10YR8/2 灰白色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 16 | 弥生土器 | 甕     | 溝50  | —      | (3.7) | 3.2  | 2.5Y8/2 灰白色    | 石英・長石・チャート  | 近江系?   |
| 17 | 弥生土器 | 壺     | 溝50  | —      | 2.9   | 7.8  | 2.5Y4/1 黄灰色    | 角閃石・石英・長石   | 生駒山西麓産 |
| 18 | 弥生土器 | 器台    | 溝50  | 21.1   | (2.5) | —    | 5YR8/4 淡橙色     | 石英・長石・チャート  |        |
| 19 | 土師器  | 高台部片  | 溝3   | —      | (2.4) | 6.0  | 7.5YR8/3 浅黄橙色  | 石英・長石・チャート  |        |
| 20 | 土師器  | 高台部片  | 溝3   | —      | (3.4) | 9.8  | 7.5YR8/3 浅黄橙色  | 石英・長石・赤色粒   |        |
| 21 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 9.1    | 1.6   |      | 10YR7/4 にぶい黄橙色 | 石英・長石・赤色粒   |        |
| 22 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 9.9    | 1.7   |      | 10YR8/2 灰白色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 23 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 9.6    | 1.5   |      | 10YR8/2 灰白色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 24 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 9.9    | 1.5   |      | 7.5Y8/3 淡黄色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 25 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 7.9    | 1.6   |      | 7.5Y8/3 淡黄色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 26 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 9.5    | 1.9   |      | 7.5YR7/4 にぶい橙色 | 石英・長石・チャート  |        |
| 27 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 8.7    | 1.4   |      | 7.5YR7/4 にぶい橙色 | 石英・長石・チャート  |        |
| 28 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 9.3    | 1.1   |      | 10YR8/3 浅黄橙色   | 石英・長石・チャート  |        |
| 29 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 14.5   | 3.1   |      | 7.5YR8/3 浅黄橙色  | 石英・チャート・赤色粒 |        |
| 30 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 14.5   | 2.5   |      | 10YR7/2 にぶい黄橙色 | 石英・チャート・赤色粒 |        |
| 31 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 14.8   | (2.2) |      | 10YR8/3 浅黄橙色   | 石英・長石・チャート  |        |
| 32 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 15.4   | 3.0   |      | 10YR8/2 灰白色    | 石英・チャート・赤色粒 |        |
| 33 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 14.7   | 2.4   |      | 7.5Y8/2 灰白色    | 石英・チャート・赤色粒 |        |
| 34 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 14.0   | 3.0   |      | 10YR8/2 灰白色    | 石英・長石・チャート  |        |
| 35 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 14.4   | 2.4   |      | 10YR8/3 浅黄橙色   | 石英・長石・チャート  |        |
| 36 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 14.8   | 3.1   |      | 10YR8/3 浅黄橙色   | 石英・長石・チャート  |        |
| 37 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 16.9   | (2.5) |      | 7.5YR8/3 浅黄橙色  | 石英・長石・チャート  |        |
| 38 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 17.4   | (2.5) |      | 10YR6/3 にぶい黄橙色 | 石英・長石・チャート  |        |
| 39 | 土師器  | 皿     | 溝3   | 18.0   | 3.6   |      | 5YR6/6 橙色      | 石英・チャート・赤色粒 |        |
| 40 | 瓦器   | 皿     | 溝3   | 9.3    | 2.3   |      | N5/0 灰色        | 石英・長石・チャート  |        |
| 41 | 瓦器   | 皿     | 溝3   | 9.7    | 2.1   |      | N5/0 灰色        | 石英・長石・チャート  |        |
| 42 | 瓦器   | 椀     | 溝3   | 14.5   | 5.8   | 6.0  | N4/0 灰色        | 石英・長石       |        |
| 43 | 瓦器   | 椀     | 溝3   | 15.0   | 5.7   | 6.0  | N4/0 灰色        | 石英・長石       |        |
| 44 | 瓦器   | 椀     | 溝3   | 15.3   | 5.9   | 5.7  | N5/0 灰色        | 石英・長石・チャート  |        |
| 45 | 瓦器   | 椀     | 溝3   | 14.0   | 5.4   | 5.4  | N3/0 暗灰色       | 石英・長石       |        |

※ ( ) は残存数値

| 番号 | 器種   | 器形  | 出土遺構 | 法量 (cm) |        |      | 色調             | 胎土         | 備考      |
|----|------|-----|------|---------|--------|------|----------------|------------|---------|
|    |      |     |      | 口径      | 器高     | 底径   |                |            |         |
| 46 | 瓦器   | 椀   | 溝3   | 14.5    | 5.6    | 6.6  | N4/0 灰色        | 石英・長石      |         |
| 47 | 瓦器   | 椀   | 溝3   | 15.1    | 6.0    | 5.8  | N5/0 灰色        | 石英・長石・チャート |         |
| 48 | 瓦器   | 椀   | 溝3   | 14.2    | 5.8    | 6.4  | N3/0 暗灰色       | 石英・長石      |         |
| 49 | 瓦器   | 椀   | 溝3   | 15.5    | 6.0    | 5.8  | N4/0 灰色        | 石英・長石      |         |
| 50 | 瓦器   | 椀   | 溝3   | 14.7    | 6.1    | 5.1  | N3/0 暗灰色       | 石英・長石      |         |
| 51 | 輸入白磁 | 壺   | 溝3   | —       | (4.0)  | 8.5  | 7.5Y8/2 灰白色    | 精良         |         |
| 52 | 輸入白磁 | 椀   | 溝3   | —       | (2.3)  | 5.0  | 7.5Y8/2 灰白色    | 精良         | 華南沿岸湾窯系 |
| 53 | 輸入白磁 | 椀   | 溝3   | —       | (5.8)  | 6.2  | 2.5GY8/1 灰白色   | 精良         | 華南沿岸湾窯系 |
| 54 | 輸入白磁 | 椀   | 溝3   | 16.0    | (4.4)  | —    | 10Y8/2 灰白色     | 精良         | 華南沿岸湾窯系 |
| 55 | 輸入白磁 | 椀   | 溝3   | 15.7    | (4.9)  | —    | 7.5Y8/1 灰白色    | 精良         | 華南沿岸湾窯系 |
| 56 | 輸入白磁 | 椀   | 溝3   | 15.6    | (4.2)  | —    | 5Y8/2 灰白色      | 精良         | 華南沿岸湾窯系 |
| 57 | 輸入白磁 | 椀   | 溝3   | 17.5    | (5.7)  | —    | 7.5Y8/1 灰白色    | 精良         | 華南沿岸湾窯系 |
| 58 | 須恵器  | 椀   | 溝3   | —       | (3.2)  | 5.6  | —              | 石英・長石・チャート | 東播系     |
| 59 | 須恵器  | 鉢   | 溝3   | —       | (6.2)  | —    | —              | 石英・長石・チャート | 東播系     |
| 60 | 須恵器  | 転用硯 | 溝3   | 10.0    | (11.6) | 2.6  | N8/0 灰白色       | 石英・長石      | 幅・長さ・高さ |
| 61 | 輸入青磁 | 皿   | 土坑45 | 10.1    | 2.4    | 4.6  | 10YR7/1 灰白色    | 精良         | 同安窯系    |
| 62 | 輸入青磁 | 皿   | 土坑45 | 10.9    | (1.5)  | —    | 10YR6/2 灰オリーブ色 | 精良         | 龍泉窯系    |
| 63 | 輸入白磁 | 椀   | 土坑45 | 14.1    | (2.2)  | —    | 10Y8/1 灰白色     | 精良         | 華南沿岸湾窯系 |
| 64 | 瓦器   | 椀   | 土坑45 | 14.0    | 3.6    | —    | N3/0 暗灰色       | 石英・長石      |         |
| 65 | 瓦器   | 椀   | 土坑45 | 12.3    | 4.7    | 4.1  | N3/0 暗灰色       | 石英・長石      |         |
| 66 | 輸入白磁 | 皿   | 溝2-C | 10.3    | 1.8    | 7.2  | 7.5Y8/1 灰白色    | 精良         | 口禿口縁    |
| 67 | 輸入青磁 | 椀   | 溝2-C | —       | (4.3)  | 3.9  | 5Y7/3 浅黄色      | 精良         | 同安窯系    |
| 68 | 瓦器   | 椀   | 溝2-C | 13.0    | 4.1    | 4.5  | N3/0 暗灰色       | 石英・長石・チャート | 高台部異種胎土 |
| 69 | 焼締陶器 | 壺   | 溝2-C | —       | (11.1) | —    | N8/0 灰白色       | 石英・長石      | 古瀬戸 耳壺? |
| 70 | 須恵器  | 鉢   | 溝2-C | 27.0    | (8.9)  | —    | N7/0 灰白色       | 石英・長石・チャート | 東播系     |
| 71 | 土師器  | 皿   | 溝2-B | 5.9     | 1.2    | —    | 5Y7/2 灰白色      | 石英・長石      |         |
| 72 | 土師器  | 皿   | 溝2-B | 13.3    | (2.2)  | —    | 7.5YR8/3 浅黄橙色  | 石英・長石      |         |
| 73 | 土師器  | 皿   | 溝2-B | 15.0    | (2.4)  | —    | 7.5YR8/4 淡橙色   | 石英・長石・チャート |         |
| 74 | 瓦器   | 椀   | 溝2-B | 13.8    | (2.8)  | —    | N3/0 暗灰色       | 石英・長石      |         |
| 75 | 輸入青磁 | 椀   | 溝2-B | 14.0    | (4.7)  | —    | 7.5Y7/1 灰白色    | 石英・長石      | 龍泉窯系    |
| 76 | 輸入青磁 | 椀   | 溝2-B | 15.8    | (2.1)  | —    | 10Y5/2 オリーブ灰色  | 精良         | 龍泉窯系    |
| 77 | 須恵器  | 椀   | 溝2-B | 15.8    | (4.6)  | —    | N7/0 灰白色       | 石英・長石・チャート | 山茶椀     |
| 78 | 焼締陶器 | 搦鉢  | 溝2-B | —       | (4.7)  | —    | 5YR5/2 灰褐色     | 石英・長石・チャート | 備前焼     |
| 79 | 瓦質土器 | 盤   | 溝2-B | 20.2    | (3.7)  | —    | N4/0 灰色        | 石英・長石・チャート | 樟葉産     |
| 80 | 瓦質土器 | 搦鉢  | 溝2-B | 29.0    | (8.0)  | —    | N3/0 暗灰色       | 石英・長石・チャート |         |
| 81 | 磁器   | 椀   | 溝2-A | 7.3     | 5.2    | 3.8  | N8/0 灰白色       | 精良         | 肥前      |
| 82 | 磁器   | 椀   | 溝2-A | 10.6    | 4.8    | 4.0  | N8/0 灰白色       | 精良         | 肥前      |
| 83 | 磁器   | 椀   | 溝2-A | 11.0    | 7.0    | 4.2  | N8/0 灰白色       | 精良         | 肥前      |
| 84 | 磁器   | 皿   | 溝2-A | 11.8    | 3.9    | 4.4  | N8/0 灰白色       | 精良         | 肥前      |
| 85 | 磁器   | 皿   | 溝2-A | 18.3    | 2.9    | 5.1  | N8/0 灰白色       | 精良         | 肥前      |
| 86 | 磁器   | 皿   | 溝2-A | 13.7    | 2.8    | 5.2  | N8/0 灰白色       | 精良         | 肥前      |
| 87 | 施釉陶器 | 椀   | 溝2-A | 9.4     | 5.4    | 3.0  | 2.5Y8/1 灰白色    | 長石         | 京・信楽系   |
| 88 | 施釉陶器 | 瓶   | 溝2-A | —       | (8.4)  | 7.2  | 2.5Y6/1 黄灰色    | 石英・長石      | 丹波焼     |
| 89 | 施釉陶器 | 壺   | 溝2-A | —       | (5.0)  | 10.7 | 5Y8/1 灰白色      | 石英・長石      | 信楽焼     |
| 90 | 施釉陶器 | 鉢   | 溝2-A | —       | (5.0)  | 13.0 | 2.5Y8/2 灰白色    | 石英・長石      | 瀬戸焼     |

※ ( )は残存数値

| 番号  | 器種   | 器形 | 出土遺構 | 法量 (cm) |        |      | 色調             | 胎土          | 備考      |
|-----|------|----|------|---------|--------|------|----------------|-------------|---------|
|     |      |    |      | 口径      | 器高     | 底径   |                |             |         |
| 91  | 施釉陶器 | 瓶  | 溝2-A | —       | (10.0) | 7.2  | 10YR5/2 灰黄褐色   | 石英・長石       | 肥前      |
| 92  | 施釉陶器 | 鉢  | 溝2-A | —       | (9.3)  | 9.4  | 5YR6/4 にぶい橙色   | 石英・長石       | 肥前      |
| 93  | 施釉陶器 | 甕  | 溝2-A | 19.4    | (7.3)  | —    | 10YR7/1 灰白色    | 石英・長石       | 肥前      |
| 94  | 施釉陶器 | 鉢  | 溝2-A | 29.4    | (5.1)  | —    | 7.5Y6/3 オリーブ黄色 | 石英・長石       | 肥前      |
| 95  | 施釉陶器 | 鉢  | 溝2-A | 35.2    | 10.5   | 10.0 | 7.5YR4/2 灰褐色   | 石英・長石       | 肥前      |
| 96  | 輸入青磁 | 椀  | 溝2-A | —       | (3.0)  | 5.9  | 2.5Y7/4 浅黄色    | 石英・長石       | 倣龍泉窯系   |
| 97  | 灰釉陶器 | 椀  | 溝2-A | —       | (3.2)  | 7.5  | 5Y8/1 灰白色      | 石英・長石       |         |
| 98  | 焼締陶器 | 甕  | 溝2-A | —       | —      | —    | 7.5Y5/3 灰オリーブ色 | 石英・長石       | 常滑焼     |
| 99  | 焼締陶器 | 播鉢 | 溝2-A | —       | (5.7)  | 13.5 | 5YR6/6 橙色      | 石英・長石       | 信楽焼     |
| 100 | 焼締陶器 | 播鉢 | 溝2-A | 31.0    | (8/8)  | —    | 7.5YR5/4 にぶい褐色 | 石英・長石・チャート  | 丹波焼     |
| 101 | 焼締陶器 | 播鉢 | 溝2-A | 39.5    | (10.7) | —    | 7.5YR4/3 褐色    | 石英・長石       | 丹波焼     |
| 102 | 焼締陶器 | 播鉢 | 溝2-A | 41.0    | (9.3)  | —    | 2.5YR5/2 灰赤色   | 石英・長石       | 堺明石系    |
| 103 | 土師器  | 皿  | 溝2-A | 10.4    | (2.5)  |      | 7.5Y8/2 灰白色    | 石英・長石       | 口縁部煤付着  |
| 104 | 土師器  | 皿  | 溝2-A | 13.7    | (1.8)  |      | 2.5Y8/1 灰白色    | 精良          |         |
| 105 | 土師器  | 火舎 | 溝2-A | —       | (4.4)  | 9.0  | N3/0 暗灰色       | 石英・チャート・赤色粒 |         |
| 106 | 土師器  | 火舎 | 溝2-A | 20.6    | 9.1    | 17.6 | 10YR8/2 灰白色    | 石英・チャート・赤色粒 | 内面上位煤付着 |
| 107 | 土師器  | 焙烙 | 溝2-A | 52.3    | (11.9) |      | 10YR6/3 にぶい黄橙色 | 石英・長石・チャート  |         |

※ ( ) は残存数値

付表2 瓦類・土製品・石製品観察表

| 番号 | 種類  | 器形  | 出土遺構 | 法量 (cm) |        |       | 色調              | 胎土      | 備考             |
|----|-----|-----|------|---------|--------|-------|-----------------|---------|----------------|
|    |     |     |      | 長さ      | 幅      | 高さ    |                 |         |                |
| 瓦1 | 瓦類  | 軒棧瓦 | 溝2-A | (12.7)  | (21.6) | 4.8   | N3/0 暗灰色        | 石英・チャート | 小丸付軒棧瓦         |
| 瓦2 | 瓦類  | 軒棧瓦 | 溝2-A | (12.6)  | (20.1) | 4.8   | N5/0 灰色         | 石英・チャート | 鎌形軒棧瓦          |
| 土1 | 土製品 | 埴塼  | 溝2-A | (11.5)  | (14.0) | (4.0) | N6/0 灰色         | 苧・チャート  | 緑青付着           |
| 土2 | 土製品 | 熔解炉 | 溝1   | (8.8)   | (6.5)  | (4.4) | 2.5YR4/4 にぶい赤褐色 | 粃殻・苧    | 外面5Y3/1 オリーブ黒色 |
| 石1 | 石製品 | 砥石  | 溝3   | (19.7)  | 8.0    | 6.4   | 7.5Y8/1 灰白色     | 転石      | 流理状組織の発達した流紋岩? |

※ ( ) は残存数値



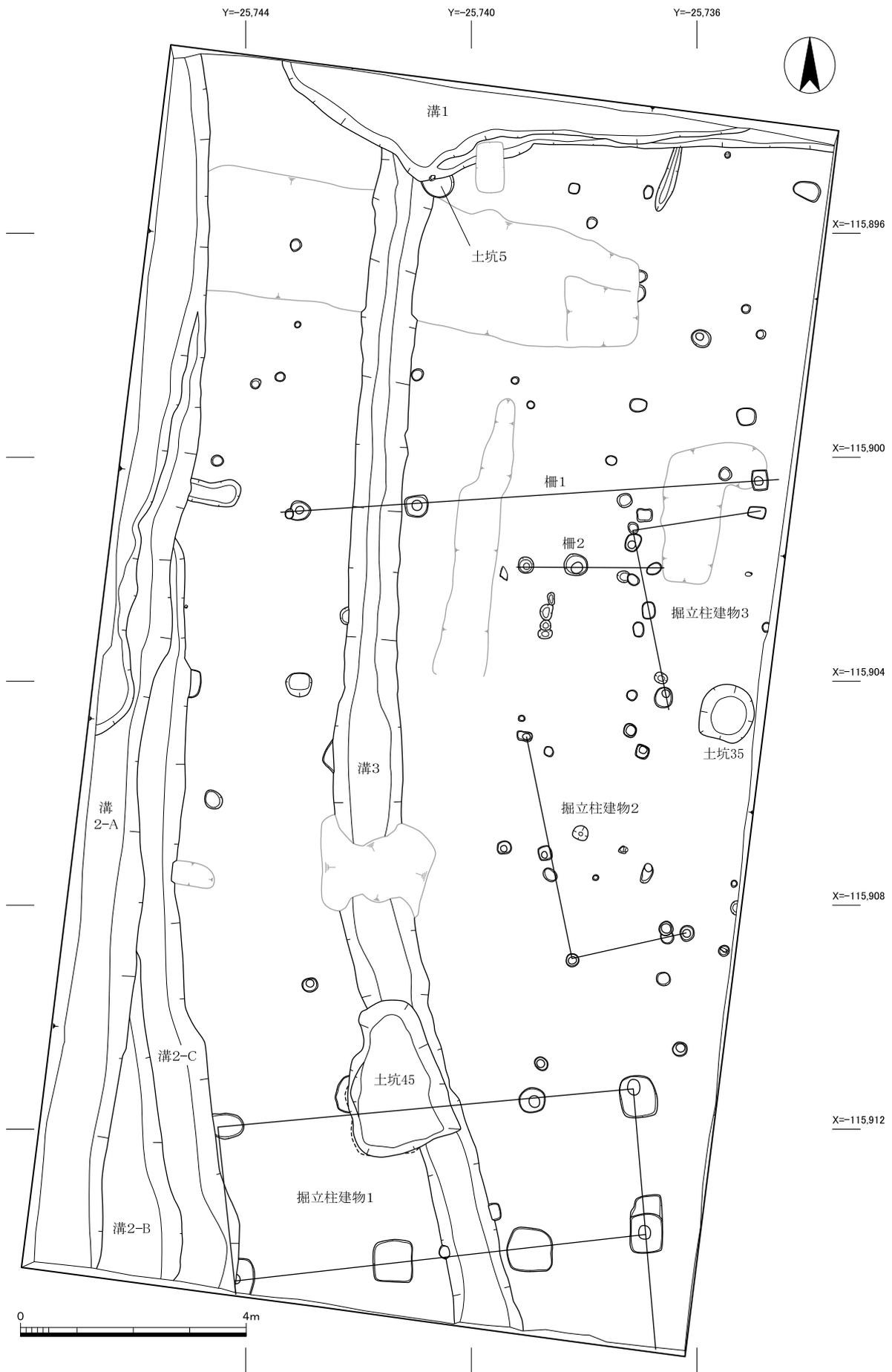
# 圖 版



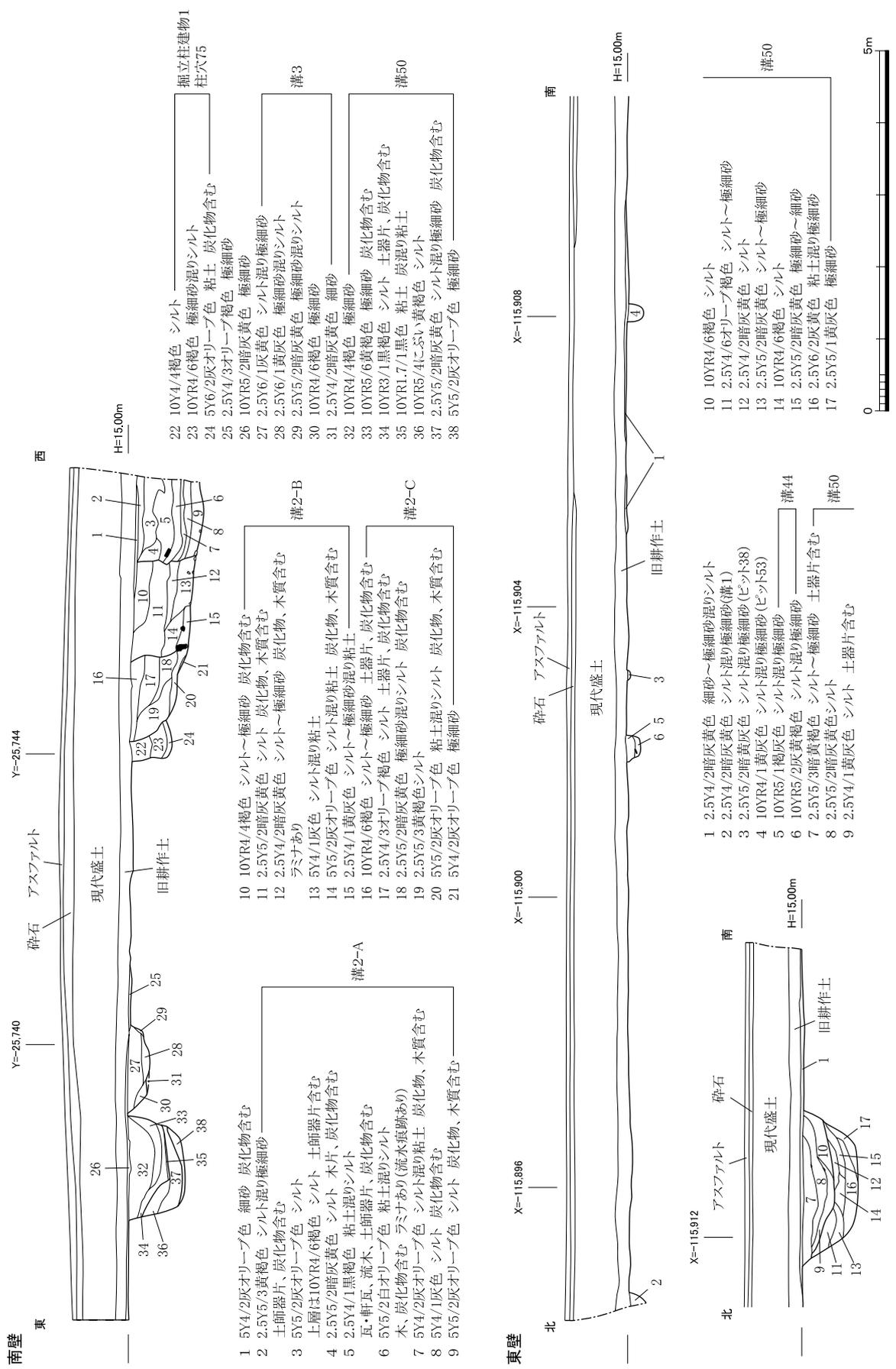


第1期遺構平面図 (1 : 100)

図版2  
遺構

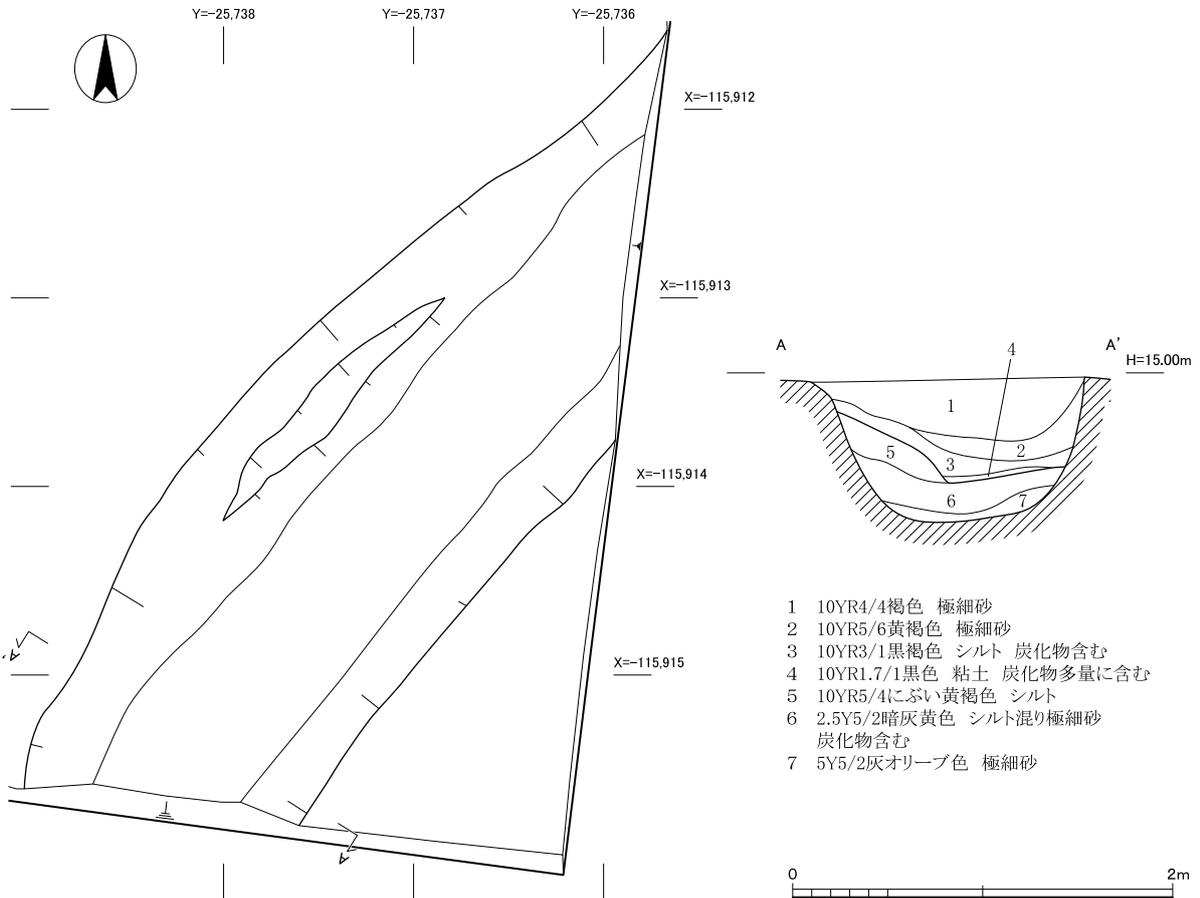
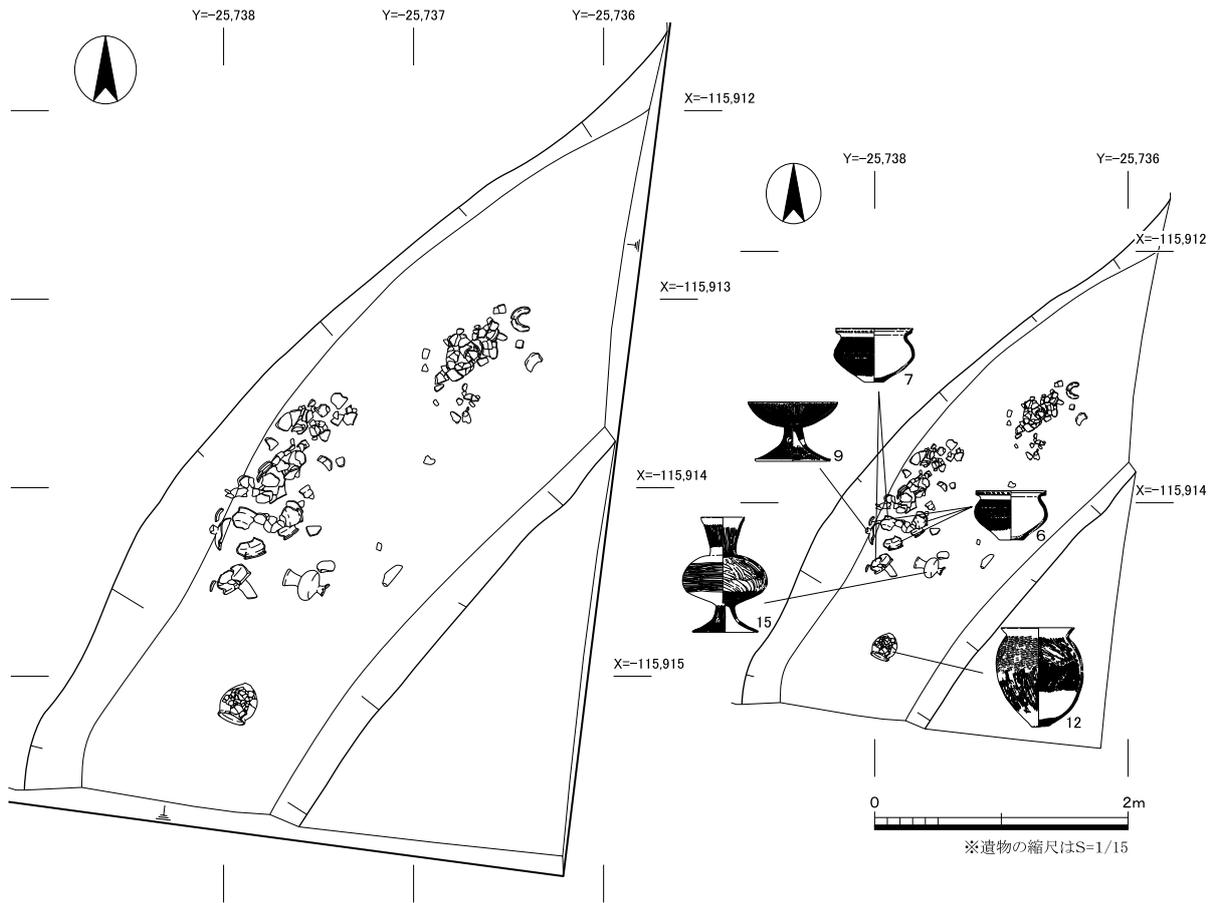


第2期遺構平面図 (1 : 100)



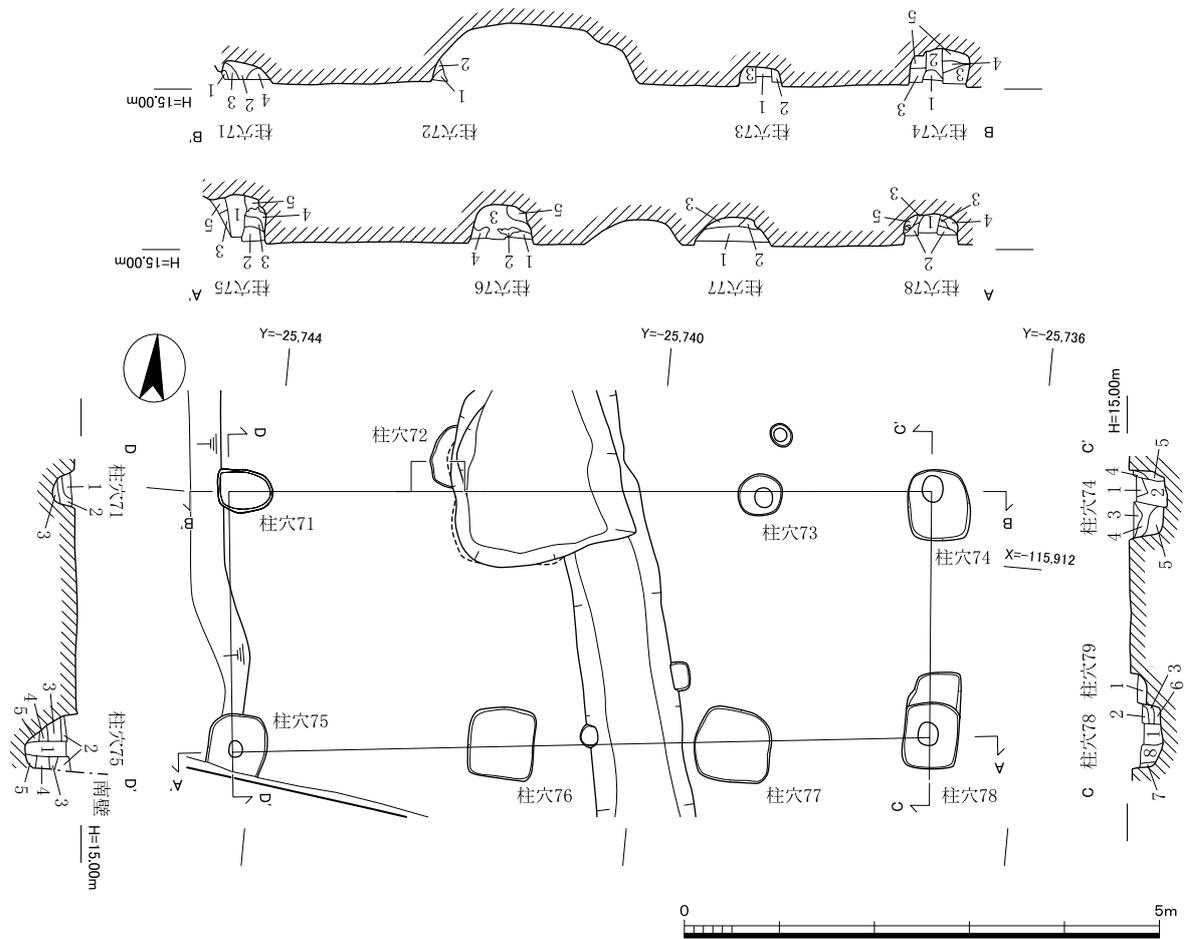
調査区南壁・東壁断面図 (1 : 80)

図版4  
遺構



溝50実測図 (1 : 40、1 : 60)

掘立柱建物1



- 柱穴71**
- 1 5Y6/1灰色 極細砂混りシルト
  - 2 2.5Y6/1黄灰色 粘土混り極細砂
  - 3 2.5Y6/2灰黄色 極細砂混りシルト
  - 4 2.5Y5/2暗灰黄色 極細砂混りシルト

- 柱穴72**
- 1 2.5Y5/2暗灰黄色 極細砂混りシルト
  - 2 2.5Y5/3黄褐色 極細砂混りシルト

- 柱穴73**
- 1 2.5Y6/2灰黄色 粘土混りシルト
  - 2 2.5Y6/1黄灰色 極細砂混りシルト
  - 3 2.5Y5/1黄灰色 極細砂混りシルト

- 柱穴74**
- 1 2.5Y6/1黄灰色 極細砂混りシルト
  - 2 5Y6/1灰色 粘土・極細砂混りシルト
  - 3 2.5Y6/2灰黄色 極細砂混りシルト
  - 4 2.5Y5/2暗灰黄色 極細砂混りシルト
  - 5 10YR5/1褐色 シルト混り極細砂

- 柱穴75**
- 1 2.5Y5/1黄灰色 極細砂混りシルト
  - 2 2.5Y6/1黄灰色 極細砂混りシルト
  - 3 2.5Y4/1黄灰色 極細砂混りシルト
  - 4 2.5Y6/2灰黄色 粘土混りシルト
  - 5 5Y5/2灰オリーブ色 粘土混りシルト

- 柱穴76**
- 1 2.5Y6/1黄灰色 極細砂混りシルト
  - 2 2.5Y6/2灰黄色 極細砂混りシルト
  - 3 2.5Y6/3こぶい黄色 シルト
  - 4 2.5Y5/2暗灰黄色 極細砂混りシルト
  - 5 5Y5/2灰オリーブ色 粘土混りシルト

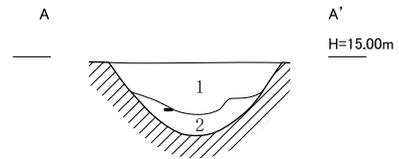
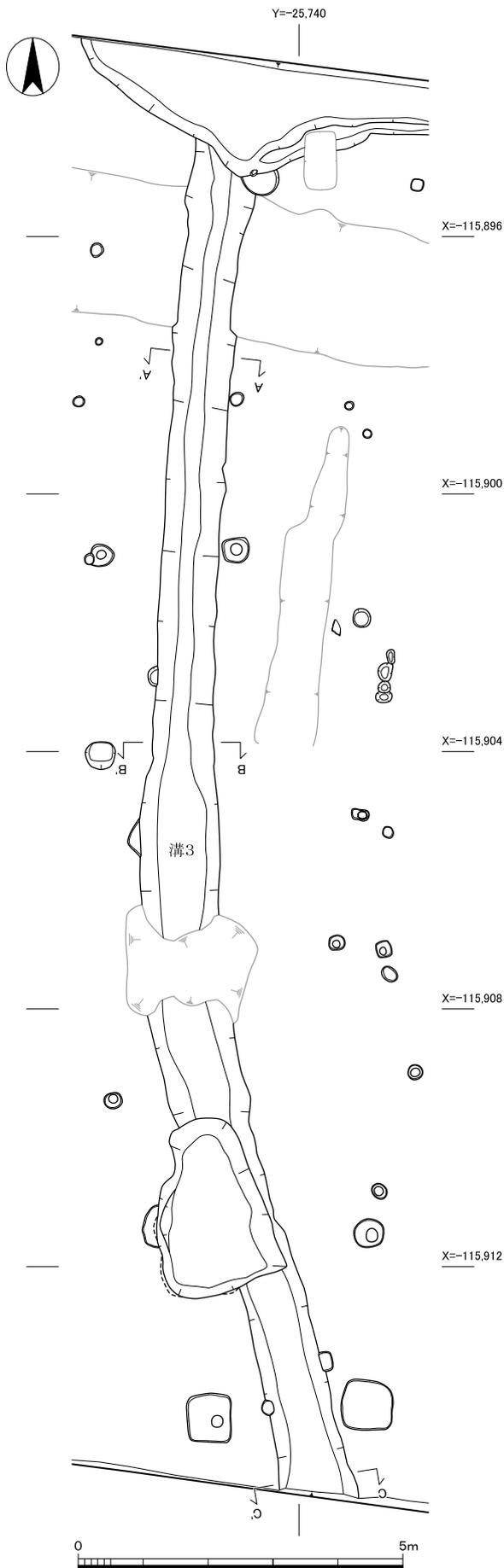
- 柱穴77**
- 1 2.5Y6/1黄灰色 極細砂混りシルト
  - 2 2.5Y6/2灰黄色 シルト混り極細砂
  - 3 2.5Y5/2暗灰黄色 粘土混りシルト

- 柱穴78**
- 1 10YR6/1褐色 粘土・極細砂混りシルト
  - 2 2.5Y5/2暗灰黄色 極細砂混りシルト
  - 3 2.5Y6/1黄灰色 粘土混りシルト
  - 4 2.5Y4/1黄灰色 極細砂・粘土混りシルト
  - 5 2.5Y4/1黄灰色 粘土混りシルト
  - 6 2.5Y3/2黒褐色 極細砂混りシルト
  - 7 10YR6/1褐色 極細砂・粘土混りシルト
  - 8 2.5Y6/1黄灰色 極細砂混りシルト

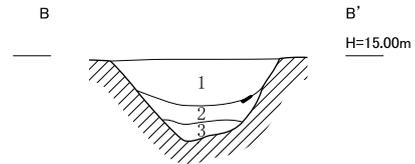
- 柱穴79**
- 1 10YR5/1褐色 極細砂混りシルト

掘立柱建物1実測図(1:80)

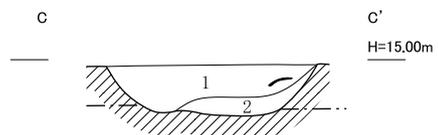
図版6  
遺構



- 1 10YR5/2灰黄褐色 シルト混り極細砂
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト混り極細砂



- 1 10YR5/2灰黄褐色 シルト混り極細砂
- 2 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト混り極細砂
- 3 10YR5/1褐灰色 シルト混り極細砂

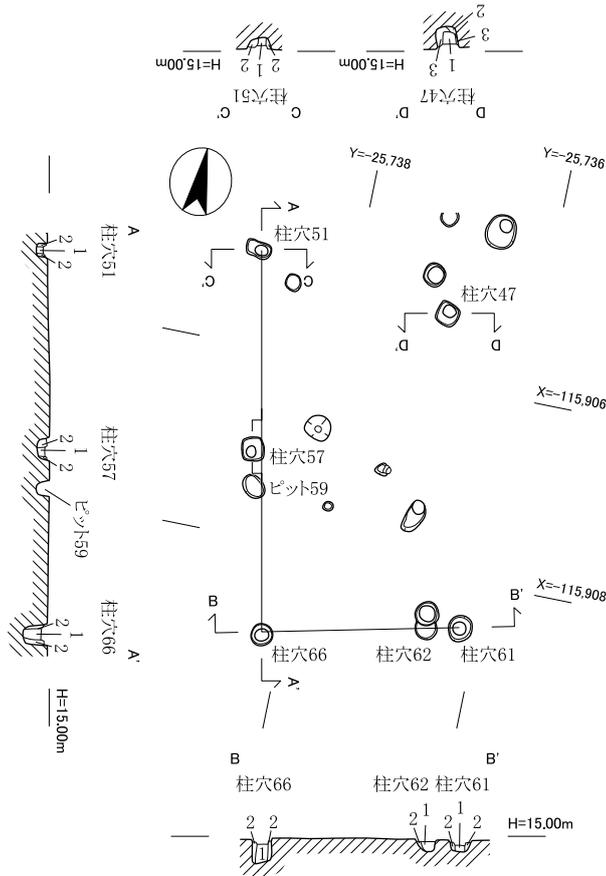


- 1 2.5Y6/2灰黄色 シルト混り極細砂
- 2 2.5Y6/1黄灰色 極細砂混りシルト



溝3実測図 (1 : 100、1 : 40)

掘立柱建物2



柱穴47

- 1 2.5Y6/1黄灰色 極細砂混りシルト
- 2 2.5Y6/2灰黄色 極細砂混りシルト
- 3 2.5Y5/2暗灰黄色 極細砂混りシルト

柱穴51

- 1 2.5Y6/2灰黄色 極細砂混りシルト
- 2 2.5Y6/3にぶい黄色 極細砂混りシルト

柱穴57

- 1 2.5Y5/2暗灰黄色 極細砂混りシルト
- 2 2.5Y6/2灰黄色 極細砂混りシルト

柱穴66

- 1 2.5Y6/3にぶい黄色 極細砂混りシルト
- 2 2.5Y6/2灰黄色 極細砂混りシルト

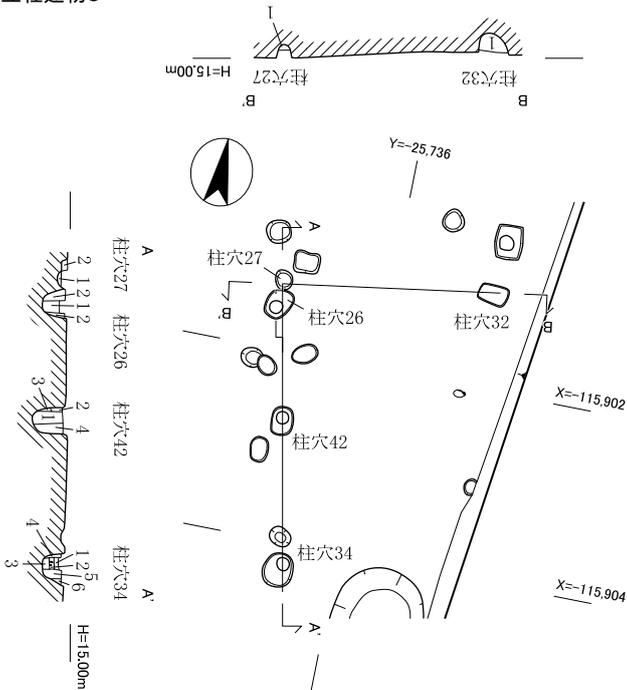
柱穴62

- 1 2.5Y5/3黄褐色 極細砂混りシルト
- 2 10YR5/2灰黄褐色 極細砂混りシルト

柱穴61

- 1 2.5Y6/2灰黄色 極細砂混りシルト
- 2 2.5Y6/3にぶい黄色 極細砂混りシルト

掘立柱建物3



柱穴32

- 1 10YR6/1褐灰色 シルト混り極細砂

柱穴27

- 1 10YR6/1褐灰色 シルト混り極細砂
- 2 10YR5/1褐灰色 シルト混り極細砂

柱穴26

- 1 10YR6/2灰黄褐色 シルト混り極細砂
- 2 10YR5/1褐灰色 シルト混り極細砂

柱穴42

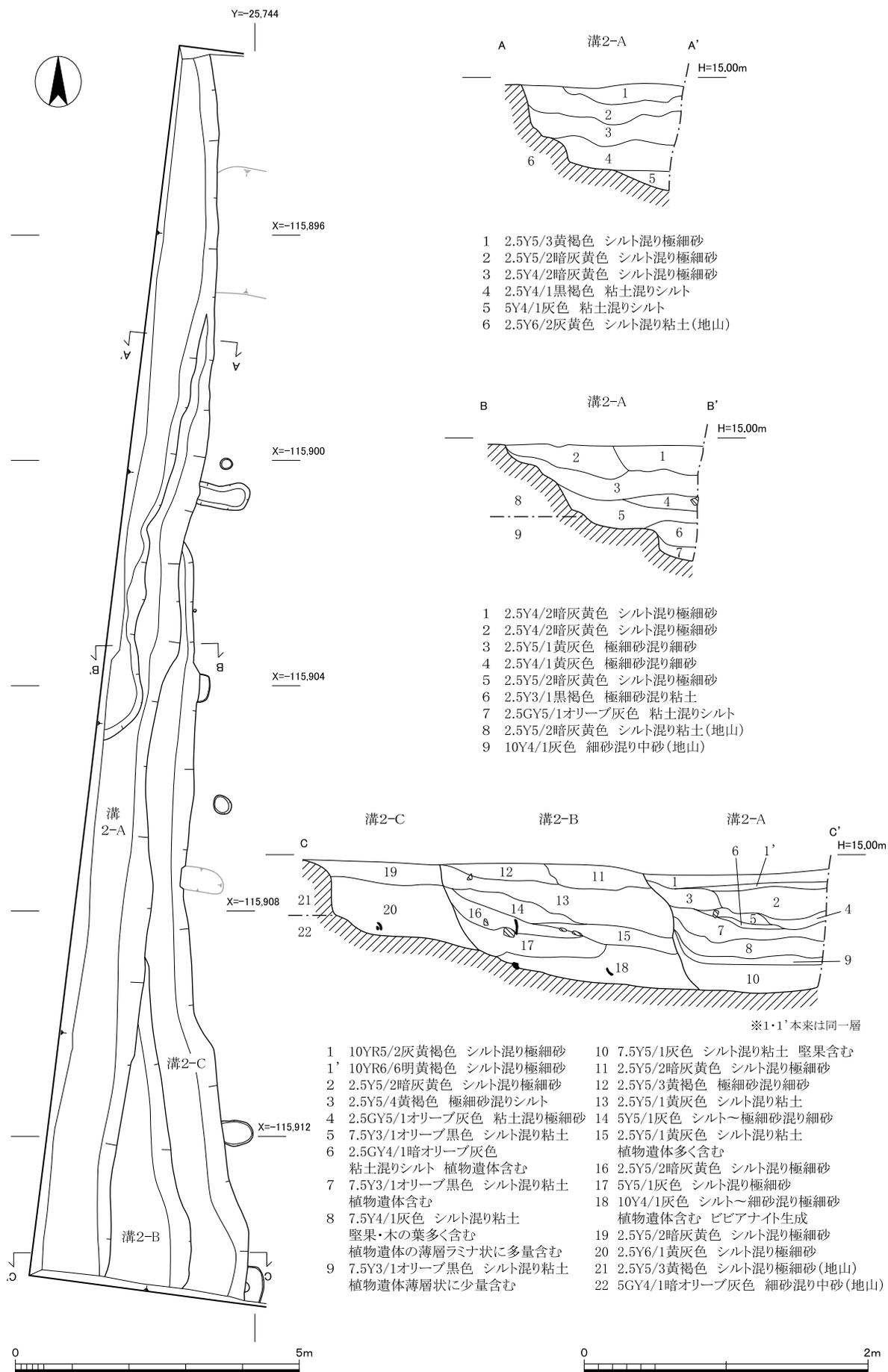
- 1 10YR6/1褐灰色 シルト混り極細砂
- 2 10YR6/2灰黄褐色 シルト混り極細砂
- 3 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト混り極細砂
- 4 10YR4/1褐灰色 シルト混り極細砂

柱穴34

- 1 10YR5/2灰黄褐色 シルト混り極細砂
- 2 5Y5/1灰色 粘土混りシルト 木質遺存
- 3 10YR6/1褐灰色 シルト混り極細砂
- 4 10YR5/1褐灰色 シルト混り極細砂
- 5 10YR4/2灰黄褐色 シルト混り極細砂
- 6 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト混り極細砂



掘立柱建物2・3実測図(1:80)



溝2実測図 (1 : 100、1 : 40)



1 調査区北半第1期全景（南から）



2 溝44検出状況（東から）



1 溝50 (南西から)



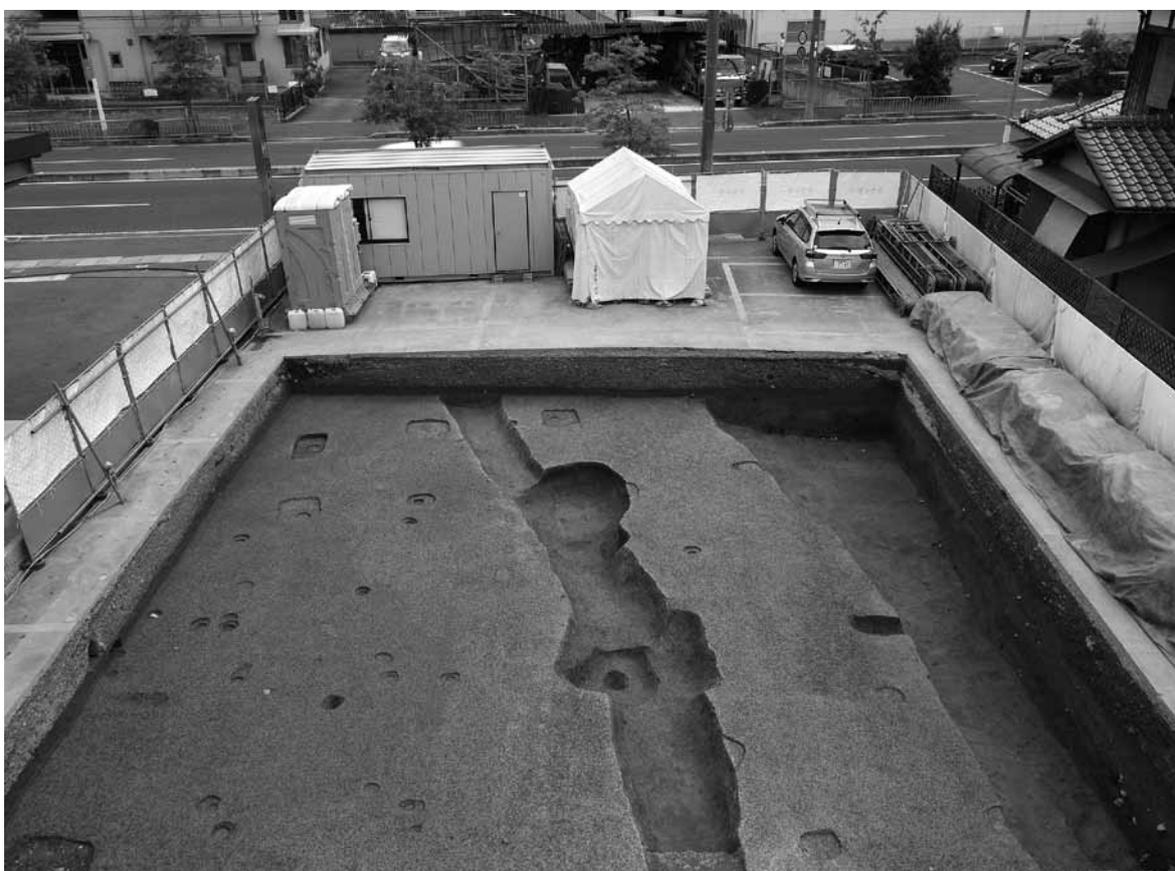
2 溝50土器出土状況 (南から)



3 溝50完掘状況 (南西から)



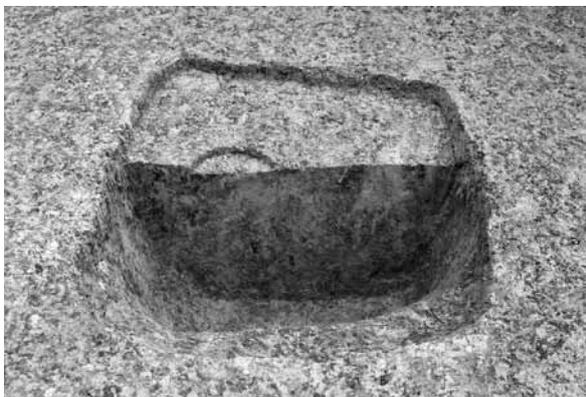
1 調査区北半第2期全景（南から）



2 調査区南半第2期全景（北から）



1 掘立柱建物1 (西から)



2 掘立柱建物1 柱穴76断面 (北から)



3 掘立柱建物1 柱穴77断面 (北から)



4 掘立柱建物1 柱穴71断面 (北東から)



5 掘立柱建物1 柱穴74断面 (南東から)



1 掘立柱建物2（北から）



2 土坑35完掘状況（北から）



3 土坑45完掘状況（北から）



1 溝1 (西から)



2 溝2-A北半 (北から)



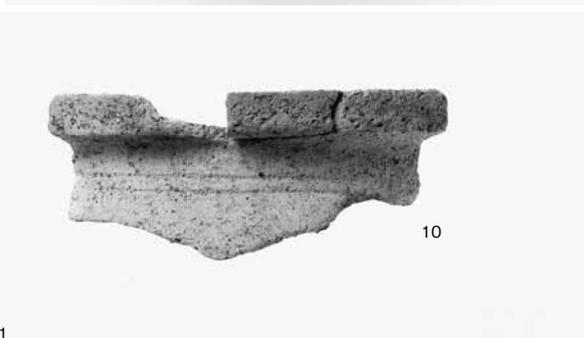
3 溝3南半 (北から)



4 溝2-A・B・C断面 (北から)



5 溝3中央断面 (北から)



溝50出土土器



溝3出土土器、溝2-A・溝1出土土製品

# 報告書抄録

| ふりがな               | おおやぶいせき・しもくぜかまえあと                 |        |            |                               |            |   |      |            |
|--------------------|-----------------------------------|--------|------------|-------------------------------|------------|---|------|------------|
| 書名                 | 大藪遺跡・下久世構跡                        |        |            |                               |            |   |      |            |
| シリーズ名              | 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告                 |        |            |                               |            |   |      |            |
| シリーズ番号             | 2022-4                            |        |            |                               |            |   |      |            |
| 編著者名               | 三好孝一                              |        |            |                               |            |   |      |            |
| 編集機関               | 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所                |        |            |                               |            |   |      |            |
| 所在地                | 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1         |        |            |                               |            |   |      |            |
| 発行所                | 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所                |        |            |                               |            |   |      |            |
| 発行年月日              | 西暦2023年2月28日                      |        |            |                               |            |   |      |            |
| ふりがな<br>所収遺跡名      | ふりがな<br>所在地                       | コード    |            | 北緯                            | 東経         | 調査期間  | 調査面積 | 調査原因       |
|                    |                                   | 市町村    | 遺跡番号       |                               |            |   |      |            |
| おおやぶいせき<br>大藪遺跡    | きょうとしみなみく<br>京都市南区                | 26100  | 773        | 34度                           | 135度       | 2022年7月                                     | 261㎡ | 工場増設<br>工事 |
| しもくぜかまえあと<br>下久世構跡 | くぜとのしるちょう<br>久世殿城町<br><br>526番地の1 |        | 777        | 57分<br>17秒                    | 43分<br>17秒 | 21日～2022<br>年9月13日                          |      |            |
| 所収遺跡名              | 種別                                | 主な時代   | 主な遺構       | 主な遺物                          |            | 特記事項  |      |            |
| 大藪遺跡               | 集落跡                               | 弥生時代後期 | 溝          | 弥生土器                          |            | 弥生時代後期の溝を検出した。<br>平安時代前期と考えられる掘立柱建物と柵を検出した。 |      |            |
| 下久世構跡              | 城館跡                               | 平安時代   | 掘立柱建物、柵、溝  | 土師器、須恵器、瓦器、山茶椀、灰釉陶器、輸入陶磁器、石製品 |            |   |      |            |
|                    |                                   | 鎌倉時代   | 掘立柱建物、土坑、溝 | 須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器             |            |   |      |            |
|                    |                                   | 室町時代   | 柵、溝、土坑     | 土師器、瓦質土器、焼締陶器、輸入陶磁器           |            |   |      |            |
|                    |                                   | 江戸時代   | 溝          | 土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付磁器、瓦、土製品      |            |   |      |            |

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2022-4

## 大藪遺跡・下久世構跡

発行日 2023年2月28日

編集  
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番  
〒602-8358 TEL 075-467-5151